
偉大なる賢者 トール&とおる

優魔くん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偉大なる賢者 トール&とおる

【Nコード】

N3936U

【作者名】

優魔くん

【あらすじ】

僕は平凡で引っこみ思案な中学一年生。そんな僕の中に手違いで異世界から賢者が降臨してもう大変！賢者は僕にいつも怒鳴りちらし、まるでガキ大将。賢者は「俺を元の世界に戻る踏み台になれ！嫌なら一生お前に取り付いてやる！」と上から目線に脅してくる。迷惑な賢者を元の世界に戻すために僕は魔法を学ぶ。

果たして、賢者が異世界に旅へ出た理由と、徹の世界に来てしまった、徹と一体となってしまった謎は？いったいなんだろうか？

この話では魔法を使う時、願いを込めて歌うことで奇跡を生み出

す事ができる。主人公のコミカルで情けない歌詞を実際に歌ってみませんか？主人公の情けない、微妙な大活躍にどうぞ期待してください。皆さんに笑いと感動を！

12話で主人公が変身ヒーローになるかも！？

最弱勇者とのシリーズ化を目指すため、一話目での世界の設定を少し変更させてもらいました。

プロローグ 賢者の旅立ち

世界とはどれだけ広いのだろうか

我々は自身が見る事、触れる事、聞く事でしか世界を知る事はできない

人は世界を観測する、故に世界は在るのではないだろうか

それは突如現れ、どんな世界から来たのかは誰にも分からない
それが何の為に、何の目的で、何を求めたのかは分からない
しかし、それはこの世界を虚無で飲み込もうとした

我々はそれを魔王と呼ぶ

魔王は我々を絶望の淵へと追いやった

しかし、救いの光も、また外の世界から来た

二人の少年は、かつて別の世界で勇者と呼ばれた存在だった

勇者たちは、私達の世界の惨劇を聞くと、手を差し伸べてくれた

異世界から来た二人の勇者

後に聖なる乙女と呼ばれる事になる、我が幼少の頃からの友人

そして偉大なる賢者と呼ばれる事になる、この非力な我

四人は魔王が引き起こす悲劇を止めるために立ち上がった

魔王を前にして、我らの希望が絶望に変わって行くのが感じられる
勇者の凄まじい剣技も、私の魔法も役に立たなかった

何度何度も魔王を倒そうとも、魔王は簡単に復活するのだ
まるで霧を剣で斬るかのようだった

それを見ていた聖なる乙女は、小さな体で魔王を抱きしめ、祈った
彼女の歌に我らが茫然と聞き酔いしれていると

彼女は神々しい光を浴び、我はその眩しさに目を手で覆った
手の上からでも感じる光の洪水が治まった後、我が視線を向けると
あれ程、強大だった魔王の姿が消えていた
聖なる乙女と共に……

一人の青年がペンを置く。いや、その青年は12歳ほどであったが、
その独特な雰囲気は少年ではなかった。

鴉の羽の様な黒髪。日の光を浴びた事が無いかのような白い肌。
髪と同じく黒い瞳はまるで虚無を宿しているかのような、強くも陰
鬱な光を灯している。服装は闇夜の色のローブをその身に纏い、胸
にはロケットを下げている。

部屋は書籍の山と中央の魔法陣で埋め尽くされ、本が日の光で痛
めつけられるのを嫌っているのか、カーテンは閉め切られ、部屋は
薄暗い。

机を立った彼は、部屋の中央を占める魔法陣の中心に座した。
彼は目を閉じ、精神を集中させる。一見すると彼は冷静であるか
のように見えるが、彼の額には薄く汗が滲んでいる。

彼はとても緊張している、魔王と戦った時と同じぐらい、もしか
するとそれ以上かもしれない。

彼は、自分がどうなるかも分からない。失敗して死ぬのか、死よ
り残酷な運命を辿るのか……

しかし、自分がどうなるうとも、諦めて引き返すなど出来ない。
決して失ってはならない物を取り戻すために……

彼は自分の心を鎮めようと、目を閉じたまま深呼吸をする。

そんな中でふと思う。なぜ自分はこの戦いについて書き記したの
か？ あんな陳腐な物語、歌詠み達が世界中に吹聴しているだろう

……

彼は口を歪めて苦笑し、首を振る。

自分がこの世界から永遠に消えてしまうかも知れない事に、彼は

自分でも思っていた以上に怯えているのかもしれない。

この世界から自分が消えてしまおうとしても、この世界に自分が存在していた証を残したかったのかもしれない。

「フツ、まるで縄張り意識を持った犬みたいだ。」

そんな事を呟く自分にまた苦笑する。

ようやく心の準備が整ったのか、彼は立ち上がって魔法の準備をする。どうやら彼の苦笑は彼の恐怖を和らげるのに役立っただけ。魔法陣の中心に立った彼は、静かに目を閉じた。

「アンナ、もう一度君に会う。絶対……」

彼はその口から歌を紡ぎ出した。

魔法とは心からの祈りだ。

切実な思い、真実の願いが込められた歌が、この世に軌跡をもたらす。

彼は歌う。

求めて歌う。

大切なものを取り戻すために……

歌い続けることに、魔法陣の輝きが増して行く。

その輝きは、いつしか、部屋を真っ白に染めた。

部屋が光の洪水に包まれた後、部屋に少年は居なかった。

第1唱 賢者は舞い降りた

日本の東京にある、とある町の道路。その脇の歩道を一人の少年がトボトボ歩いている。

年は12歳ぐらいで、鴉の羽のような黒髪を持ち、一度も日の光を浴びた事が無いかの様に白い肌をしている。髪と同じく黒い瞳は、まるで虚無を宿しているかのような、強くも陰鬱な光を灯している。彼は中学生らしく、制服を着て、かばんを両手に持っている。

空は蒼く澄み渡り、近くに林も無いのにどこかで鳥の鳴き声が聞こえる。そんな良い天気の下、彼はひたすら下を向いて考え事をしていた。

「俺の名前は田中徹。好きな食べ物は酢豚。趣味はゲーム・・・じゃなくて、えっと何にしよう・・・？」

僕は中学に入学し、今日が最初の登校日なのだ。地方から東京に引っ越してきたために、友達がまだいない。ただでさえ、僕はちよっぴり引っ込み事案なのだ。

「クラスの全員と友達に・・・いや、5人ぐらいは友達になるぞ」
前言撤回、僕は重度の引っ込み思案でした……

「俺は清水達也。小学校の時から空手をやっていました。勉強のほうはみんな、よろしく！」

クラスみんながクスクスと笑う。彼はユーモアあふれる人間らしい。清水達也は僕と同じ黒髪で黒い瞳で白い肌をしているが、僕とは全く違う人のようなのだ。

清水達也が席に着いた。次は僕の番だ。

「えっと・・・ぼ・・・僕、は田中、徹とあるです。好きな食べ物は、えっと・・・酢豚。趣味は・・・えっと・・・色々な事に挑戦したいです」

僕はがっかりして、席に座った。これが今朝の堅い決意の結果とは……。

その後も僕はひとりで黙々と席に着き、一人だけで帰る事となつてしまった。不器用で人付き合いが下手くそな自分が不甲斐無い。僕はひとりで、とぼとぼ歩いていた。

僕には誰も声をかけてくれない、それは僕から声をかけるのが下手だからだ。

（一人で黙り込む奴に誰が話しかけるものか。）

僕はそんな事を考え込み、周りに注意を向けなかった。誰も僕に声をかけなかったが、かわりに車のクラクションが僕に声をかけた。ププー！

「へっ？」

僕は体が動かなかった。僕はその時、何も感じる事はできなかった。人は恐怖を目の前にすると、思考が働かなくなると言う事を実感した。避けようという考えさえも浮かんでこないのだ。アニメやドラマで車に轢かれそうになって、棒立ちになるシーンを馬鹿だなあと思ったが、実際に避ける事の出来る人は凄い事だと分かった。

自分の目の前に車が迫っていて、フロントライトが僕を睨んでいるかのようだ。そのタイヤが上げる、悲鳴に似た急ブレーキの音が僕の耳を引っ搔く。

思わず目をつぶってしまう。そんな事に意味はないのに……

僕の体が宙に浮かび、空を舞う。

ガードレールを越えて歩道の上に……

僕は絶対に死んだと思っていたが、トラックの運転手が自分にかけてよってきて、自分が無事な事に初めて気がついた。

「君、大丈夫か！は、早く救急車を呼ばないと！えっと、110だっけ？何番だっけ？」

かわいそうな程に混乱した声によって僕は正気を取り戻した。不思議な事に痛む所はない、意識もはつきりしている。

「それは僕が死んだ時にかける番号ですよ。僕は大丈夫です、おじ

さん。僕もぼつとしていました。すみません。僕は失礼します」

僕はそう言った。奇跡的にも僕に被害はなかった。運良くトラックを避ける事ができたようだ。きつと無意識に自分から歩道に飛び込んで避けたのだらうと思う。

僕は面倒な事が嫌なためそのまま立ち去った。

トラックに轢かれそうになった事と比べたら、学校の事などたいした問題ではないような気がし、少しだけ気が落ち着いて家に向かった。

僕は家ではいつも一人だ。僕の母は僕が幼少の頃に交通事故で亡くなってしまった。その時はアメリカに住んでいたような覚えがある。

父は仕事でほとんど家を出かけていて、僕は家を一人で過ごす。

僕は今日も一人で冷凍食品を食べる。一人の生活に慣れてしまっても、一人ぼっちの寂しさが完全に消える訳ではない。最近の冷凍食品はおいしさや栄養バランスが良い事が唯一の救いだ。

僕は食後の歯磨きをしている最中に鏡で頭にけががないか確認した。交通事故の傷でハゲができては困る。

『大丈夫だ。少し傷を負っていたけれど、俺が治してやった。まあ、将来のハゲまでは知らないが……』

「そっか、それなら良かった」僕は安堵し、部屋へ向かうとする。『ちよつと待て、俺が話しかけても気にしないのか？ 俺を無視するな！』

少し慌てた声が僕を呼びとめる。

僕は暫くの間、ボケつとしていたが、すぐにハツと気がついた。『頭を打っておかしくなったのかなあ？』

『お前の頭は元々おかしいんじゃないか？』

その声は少し、あきれているようだ。

僕は周りを見渡すも、僕のそばには誰もいない。

「どこに居るの？ どこから覗いているの？」

僕の声に少し怯えた色が浮かぶ。

『鏡を見る、鏡を』

その声が言った。

僕は鏡を覗いてみると、そこには平凡な僕の顔が映っている。

僕が口を開ければ、鏡の中の僕も口を開ける。僕が頬を引っ張ると、鏡の中の僕も頬を引っ張る。しかし、鏡の中の僕は本物の僕よりも若干強気な顔で、自分に自信が溢れているかのようなのだ。

まるで僕とは別人……

『そうだ、俺はお前とは別人だ。まあ、全くの別人でもないけどな』その声は僕の考えが分っているようだ。

『お前に説明しなくちゃならない。だからお前は手鏡を持って椅子にでも座れ』

「う、うん」

僕は思わず頷く。

僕は椅子に座り、手鏡を覗きこむ。鏡を覗き込むなんて、他人に見られたらとナルシストだと思われるそうだ。

「君は誰なの？」僕は尋ねる。

鏡の中の僕は目を閉じて考える。

『驚くなよ。俺は此处とは違う世界の住人だ』

「こことは違う世界の住人？ 君は外国から来たの？」

『馬鹿、そういう意味じゃねえ。まあ、こんな子供がすぐに理解できるわけがないかあ……』

僕はむっとする。鏡の中の僕は僕と同じぐらいの年のくせに、なんでこんなに偉そうなのか。自分に自分が馬鹿にされるとは腹が立つ。僕は僕に………なんかこんがらがってきた。

『俺の話は長い、よく聞け。世界とは、自分達が住むこの世が唯一のものではない。まるで夜空に浮かぶ星のように何千何万、無限の世界があるんだ。この世界もその内の一つだ。俺はこの世界とは別の世界か来た。その世界では魔法がそれなりに発展しているんだ。』

俺は魔法を使つてこの世界に来てしまった」

僕は首をかしげる。

「なんで君はこの世界に来たかったの。なんで君は鏡の中にいるの」
『馬鹿な奴。俺は鏡の中ではなく、お前の中にいるんだよ。』

僕は驚き、固まる。彼は続けた、

『俺は魔法に失敗したようだ。本当は別の所に行きたかったが、この世界に来てしまった。それで、何故お前の中にいるという理由は、お前と俺が同じ魂の持主だからだと思われる。まさか、こんな情けない奴が俺と魂が共有するものとはなあ』

彼はため息をつく。僕は腹がたつが言い返せない。僕が情けない人間であると言う事は、僕も認識している事実であり、非常にくやしい。

僕は学校の事を考えないように、彼に質問した。

「魂を共有するって、どういうこと？」

『俺の世界にある神話ではこうある。……神は何も無い大地に一つの種を植えた。その種は長い年月をかけて、ついに芽を出した。それが世界の始まりである。その芽はさらに長い年月を重ね、大きく育つてゆき、無数の枝を生やして行つた。その枝の先に宿る蕾の一つ一つが世界であり、その内の一つに我々は生きる……』

鏡に映る彼はその先の説明を少し考えるかのように話が途切れた。もちろん僕はちんぷんかんぷんで、ボケつと話を聞いている。

『例えると、お前が別の国で住んでいる世界や、お前が陽気に友達とおしゃべりしている世界など、お前が住んでいる世界とちよつとだけ違う世界もあるかもしれない。それと同じく、魔法が当たり前のよう存在している世界や、魔物達が闊歩している世界もある。つまり、全ての世界の始まりは世界の大樹の根元で繋がっていて、全ての世界には互いに似た存在が在る。その似た存在の事を「魂を共有する者」と俺がそう呼んでいる』

彼の話をかみ砕くところという話かもしれない。

SF小説などでは、よく平行世界パラレルワールドについて描かれる。彼が話したよ

うに、今日僕は独りで帰ったが、もしかしたら友達と一緒に帰ったかもしれない。そんな、「もしもの世界」が無数にあるのがパラレルワールドだ。

現在よりも遙か昔、地球や宇宙誕生の頃からパラレルワールドとして世界が枝分かれしたとすれば、中には魔法や不思議な物が存在する世界があってもおかしくないかもしれない。自分の世界とは根源が一緒でも全く異なる世界、つまり異世界の事だ。

僕は数日後にそんな風だと解釈した。実際、話を聞いた時点で、僕は彼の説明を全く理解できず、ただただ聞き流しているに等しかった。

トールの話を全く理解できなかった僕だが、とりあえず話を進めた。

「それで、君は魔法を使っただの？ 君はその世界でどんな人だったの？」

彼は得意げになった。

『俺はかつて勇者と共に俺らの世界を荒らす魔王と戦った賢者だ』あまり賢者って柄にも見えなかったが、もちろん口にはしない。

「君は間違っただこの世界にきたって言うけど、本当は何処に行きたかったの？」

『それは……』

彼はどこか遠くを見ているようだった。すぐに彼は首を振って苦笑した。

『ま、今は関係ない。それで、俺がお前の中にいる理由だが……それは俺にも分からない』

「分からないの？ 賢者なのに？」

『フン、賢者でも分からんさ。一緒に魔王を倒した勇者たちは、俺の世界の誰かと体を共有した訳ではなかったらしい。俺達が異常なのか、彼らが特別なのかは分からない。俺とお前が「魂を共有する者」という考察も、結局は俺が勝手に考えた事だしな。そこん所はおいおい考えていくしかない』

彼はお手上げらしい。

『それで、俺はこの世界に干渉する事が難しいらしい。色々試してみたんだが、せいぜいお前に干渉する事ができる程度だ。帰り道で、大きな鉄の塊にぶつかりそうになっただろう。その時、俺がお前を横に飛ばして、危機を救ってやったんだ。感謝しろよ。』

「う、うん、ありがとう。」

僕は頷く。

『よし、じゃ俺の言う事を聞け』

とても偉そうに賢者様が命令をなされた。

「な、何？」

『俺が元の世界に戻る手伝いをしろ』

「へっえ？」

『いいか？ 俺がこの世界に来てから、お前に少し干渉する程度しかできないんだ。もちろん俺だけでは元の世界に戻れない。そこでだ、お前が魔法を覚えて、俺が元の世界に戻るための踏み台になれ』
僕は驚いた。自分が魔法を覚える。数学の公式もいまひとつなのに！

「僕には無理、無理」

『じゃ俺が元の世界に戻る発射台になれ』

「何も変わらないよ」

僕は泣きそうになる。

『情けない顔をするな。大丈夫、天才賢者様の俺が教えてやるから。それに俺と魂を共有する以上、お前に魔法の素質があるはずだ。ただ魔力の少ないこの世界では気がつきにくだけさ』

彼は自信満々だ。

「僕には無理だよ。自分の事もできない人間が他人を助けるどころか魔法なんて、・・・使えやしないよ」

『ふーん。なら俺はずっとお前の中に居座る事になるぜ。トイレも、結婚した後もな。いつも口出ししてやるよ』
いじわるそうに言う。

「そ、そんなの嫌だよ。」

『なら協力しろ、俺はトール・T・ナーガだ。よろしく、田中徹。^{たなかとおる}」

「なんで僕の名前を？」

僕は首をかしげる。

『俺、実は昨日からお前の中に居たんだ。お前にどう話しかけようか迷っていたんだ。まあ、がんばれ友達5人！』

「そ、そんな事まで聞いていたの！人をからかわないでよ！」

僕はあわてる。

そんな強気で偉大なる賢者と弱気で平凡な僕の共同生活が始まった。果たしてこの二人は上手くいくのでしょうか。

第2唱 魔法の目覚め（前書き）

突然、自分の中に自称賢者ことツールが話しかけてきた。彼を元の世界に返品、・・・いや、帰る手伝いをするために徹は賢者から魔法を学ぶ。果たして、彼は魔法を使えるようになるのか？
それは神のみぞ知ることである。

第2唱 魔法の目覚め

『おい、徹。何ぼやばやしれるんだ』

僕は鏡に映る、自称賢者様、ことツールと向き合った。彼は相変わらず図々しい態度ではあったが、僕にはこれから教わる魔法の事で頭がいっぱいだった。

（魔法……。いったいどんな事をするんだろう？ハリーポッターみたいに物体浮遊や、ドラクエみたいに火を出すのだろうか？）

僕はファンタジー小説が大好きで、魔法を使うなんて無理だとは思ってはいるが、使えるものなら使ってみたいのだ。

「ところでさ、ツール。異世界の住人である僕たちが普通に話をしているけれど、もしかして翻訳の魔法とかを使ったの？」

鏡の中でツールが頭を振る。

『いや、俺がお前と同化している時は驚いたし、お前達が俺たちと同じ言語を話しているのを聞いた時も驚いていたぞ。なぜだかは分らないが、もしかしたら、お前たちの世界と俺たちの世界は意外と近い世界なのかもしれないな』

ツールが不思議そうに答える。

『まあ、そんな事はどうでもいい。お前に魔法を覚えてもらわなくちゃな。徹、いいか。魔法は己の心から生みだすものであり、何を思うか、どんな事を願うか、それが重要なんだ』

ツールの言葉に僕はうなずく。

「それで、どうやって魔法を使うの？」

『魔法は願いを込めて唄を歌う事で、現実には己の心を映し出す事なんだ。歌詞は己の心の中から探し、曲は己の気持ちに従い、喉を震わせるんだ』

偉大なる賢者様は、真剣に、ありがたい悟りをご教授していただいたが、僕にはさっぱり……。
「実際に見せてよ」

僕はせかす。

『分かってないな、魔法がどれだけ難しいのか。今の俺では上手く魔法を使えず、残念ながら手本を見せてやれない。お前、自分でやってみろ』

ツールにそんな事をふられて僕は少しあわてた。

「いきなり無理だよ」

『まあ、物は試した。お前、今何がしたい？』

ツールに尋ねられる。

「ぼ、僕？引っ込み思案を直したい。将来の夢は……、えっと何にしよう……」

僕は一人考え込む。ツールは僕のうじうじした姿に、少しいらいらし始めたようだ。

『もつと単純な事でいい。喉かわいたとか、腹減ったとか。単純な物事程集中しやすいからな』

「えっと、少しトイレに行きたいかな。少し、ほんの少しだけ便秘ぎみなんだ」

僕は答えてから、言い訳じみた事をいった。実際は入学式の緊張のせいで昨日から出ていない。

『下品だが、いい例だ。便をすませたい事を歌にするんだ』

ツールが無茶な事を言う。

「えっと、僕は歌なんて、あまり歌った事ないし……、どうすればいいのか……」

『つべこべ言わずにやれ！』

ツールが怒鳴る。

僕は必死の思いで考える。便を済ませたい思いを歌うなんて、人生で最高に下らない事に必死になる自分はきつと滑稽だろうに。

10分経過。

『徹、まだか。いつまでかかってるんだよ』

ツールがいらいらしている。

「もう少し待っててよ」
僕は情けなく返事する。

20分経過

『徹、いい加減早くしろ！何時まで待たせるんだ』
トールが切れかけている。
「……………」

僕は沈黙して、考える。

40分経過

『と、徹…………。ま、まさか、漏らしたんじゃないだろう…………。な？』

トールが恐る恐る尋ねる。

「いや、そんな事ないよ。ようやく考えがまとまったんだ。歌詞だけだけど」

僕はあわてて返事をする。中学生になってそんな疑いをかけられるのは恥ずかしい。

『よし、じゃあ、歌え。曲もしっかりしている方が良いが、物は試しだ』

僕は頷き、歌を歌う。

願いを込めて歌う。

便を済ませたいと、情けない思いを込めて歌う。

題名：お腹の痛い^{とある}の飛んで行け！

作曲：田中 徹

作詞：田中 徹

歌：田中 徹

グルグルまわる僕のお腹

ゴロゴロ暴れるお腹の虫
昨日食べた物はなんだっけ？

ギョルギョル響く僕のお腹
ギリギリ閉まる腸のお中
ユツケはダメと言ったけ？

助けて助けて トイレの神様
炎の苦しみ 止まらないですか
僕の腸はメビウスの輪か？
無限の地獄からクモの糸を！

「『……………』」

僕は歌った余韻に浸った。それは重い沈黙だった。どうやら効果
いまひとつのようだ。僕のお腹は相変わらず張っている。

『…………センスねえな。』 トールは呟く。

（自分でも歴史上、人類初の最高にくだらなく、情けない歌だとい
う事ぐらいは自覚している。しかし、お前が出した課題がくだらな
いのだから、歌もくだらないにきまっているではないか！）

もちろん実際に口にはしない。

「しかたないでしょ、歌を作るのは初めてなんだから。」

僕はそう言った。

『できるまで歌い続けろ！もらしてもやれ！』

トールが怒鳴る。

僕は続けた。

何度も失敗してもあきらめなかった。

魔法の神秘の扉を開くため。

輝く明日へ向かうため。

どれ程困難な壁が立ちはだかろうとも、それを越えた先にある物を目指すため。

……決してトールが怖かったのではない。

2回目、ミス！

3回目、ミス！　どうやらはぐれメ・ルを攻撃するより難しいらしい。

4回目、どうやらトールは退屈し始めたようだ。

5回目、トールは眠りにおちた。

6回目、僕のお腹がゴロゴロ鳴った。少しだけ痛かった。

7回目、トールの眠りは深くなったようだ。

僕が8回歌った後。

『で、どうなんだ？お前のお腹。スッキリしたのか？』

トールの質問に僕はハツとする。僕のお腹の中に居座っていた敵は、いつの間にかに退散しているようだった。

「これが魔法か！凄い！くだらない事だけど、凄い！」

僕ははしゃいだ。

『確かに、くだらない歌詞で、くだらない歌で、くだらない願いではあったが、それで魔法を発揮させられたとは、おみごとしか言いようがねえな。さすが俺様と魂を共有しているだけの事はあるな』

トールはトールなりに褒めているのだろう。そうは思えないが・・。

これが僕の初めての魔法だった。下品で下らない事ではあるが、それでも僕は初めての魔法に大感動だった。

追伸、この魔法は僕のお腹の中身をトイレにテレポーテーションさせるものらしい。トイレにはお腹の中身が詰まっていた。僕はトイレのスポンを手に排水管と激戦を繰り広げた。これからは排水管の詰まりを直す魔法を覚えた方が良さそうだ。

困難とは乗り越えるためにある。

その先にある物を見る事ができるのは、乗り越えた者だけだ。

困難を乗り越えた先に大きな壁が立ちはだかったとしても、

それはその時に考えればいいや・・・。

俺に導かれて徹は歩む。

それが遥か遠い約束の地へ辿りつけるのか・・・

それは神のみぞ知る事だが、神はそんな事に見向きもしないだろ

う・・・。

トー

ル・T・ナーガ

第3唱 急が場走れ！（前書き）

自称賢者のトールに魔法の手ほどきを初めてうけた徹^{とある}。彼は立派な魔法つかいになってトールを元の世界に送り戻せるか？

第3唱 急が場走れ！

いつの頃だろう・・・、きっと4歳の頃の夢だと思う。

母親が笑いながら「いい子に留守番しているのよ。」と言う。

僕は行かないでと言えはよかった。そうすれば母親が交通事故に合わなかったかもしれないのに！

しかし、その言葉は口から出てこない。声に出せない。

幼い僕はただ母親が出かけるのに笑顔で手をふるだけ・・・。

母親は笑顔で口を動かし、声をかけてくる・・・、

何を言っているのか聞き取れない、僕は心のなかで母親を呼び続ける。

「うるせえええ、ママ、ママ喚くな！寝ている時ぐらい、ちったあ静かにしろ！」

（自称）賢者様、ことトールの怒鳴り声が僕の今日一日の始まりを告げた。

僕はびっくりして飛び起きた。僕は茫然としてみるとトールの怒鳴り声がまた頭の中に響き渡る。

「朝から喚いて俺を無視するとはいい度胸じゃねえか、ああん！？」
賢者様は朝からご立腹のようです。

「えっと、鏡、鏡。」

と、僕はコントみたいに手探りで鏡を探す。

鏡の中のトールはこちらをじっと睨んでいる。

「ごめん、トール。僕、そんなに寝言がうるさかった？」

「たあつく。どうしてお前みたいな奴が俺と魂を共有する者なんだか。神の御技はたかだか人間の俺には理解できないぜ！」

トールが嘆く。

僕はトールの言い草にはひどいと思うが、ふと思った事に気を取られていた。

「ねえ、トール。願いを込めて歌う事で魔法を使えるのなら、死んだ人を蘇らせることもできるのかな？」

僕の呟きにトールは難しい顔をする。

「まあ、難しいだろうな。徹にはまだ説明していない事がある。魔法は願いが強く、歌が上手で、素質があればなんでもできるというわけではない。」

トールは少しだけ賢者らしく、難しい顔つきで語る。

魔法は心から生まれるものであり、強い願いと、美しい歌により世界に干渉する事ができる。

しかし、魔法はそれを使うものだけの心に反応するわけではない。世界には恒常性があり、常に正しい姿に有ろうとする力がある。それが魔法を阻む一つの原因である。その世界の恒常性を越える魔力がないと魔法は使えないとの事。

それと魔法をかける対象の心にも影響される。傷を癒したり、魔法で危険から守ったりなどの魔法は、かけられる対象の心も望むことだから魔法をかけやすい。

しかし、攻撃魔法は掛けられる対象の心が拒絶するため、魔法をかける事は難しいとの事。

そして攻撃魔法は、相手を傷つける事を心の底から望まないといけない。そのような事は生粋の悪人である事や、相手に対する怒り憎しみや、戦意がなければ難しいらしい。

「それで、死者を蘇らせる事は、世界の恒常性に阻まれて人類にはまず不可能だ。ゾンビやアンデッドも、元々は死んだ人を蘇らせたいと純粋な願いからの魔法だったが、失敗して願いが歪んでしまった物なんだ。・・・人を蘇らせる事は犯してはならない禁忌だ・・・。」

トールの静かな語りに僕は心が沈む。

「母さんもそんな事のぞまないよね・・・。」

僕の呟きにトールは悲しげな顔をしてどこか遠くを見る。

僕は気まぐしくなって鏡から目をそらす。すると地獄の門番が目に入った。短い門番は8を指し、長い門番は6を指す。つまり、am・8:30・・・。

僕は時計を目にしてベッドから跳ね起きた。

「まずい、遅刻だあ！どうして早く起こしてくれなかったんだよ！」

「んなこったあ知るかあ！てめえが早く起きなかったのが悪いんだよ！」

トールが怒鳴り返す。

僕は大慌てで支度をする。しかし、とても間に合いそうにない。

「トール、瞬間移動みたいな魔法はないの？」

僕は泣きすぎる。ツールは難しい顔をして、

「あるはあるが、難しいぞ。」

「いいから教えて!？」

ツールはしばらく考えて、

「そうだな、切羽詰まっていた方が魔法を覚えやすいかもな。お前には一人前になってもらわねばこっちが困るし。」

「いいから早くして!」

僕は急かす。

「瞬間移動の魔法を使う時は、行きたい場所を正確に思い浮かべないといけない。下手すると地面に埋まったり、そこにいる人と混ざり合ってしまう可能性がある。」

（それってかなり危険ではないですか!）

「そして昨日やったように、瞬間移動したいと願いを込めながら歌うんだ。」

（ええい!この際やってやる!）

僕は即興で歌を考えた。

題名 遅刻しちゃうよ!

作詞 田中 徹とあ

作曲 田中 徹
歌 田中 徹

地獄の鐘が (リンゴーン リンゴーン)
悪魔の声が (キンコーンカーン)
僕の頭は (ドーンヨーン ドーンヨーン)
お先の見通し真っ暗さ

どうしたら良いの？
どうすれば良いの？
後ろから指さし笑い物
職員室はまっぴらなのに

神様仏様悪魔様
なんでもいいから助けて
僕のイメージ
僕の生活
僕のプライドを守るため
なんだってするから
お願い僕を
あの地へつれていって (リンゴーンゴン)

僕は歌ったが失敗した。

「徹。きちんと瞬間移動する場所をイメージしたか？」

「そうか、焦ってた。えっと、誰に見られず、安全な場所は・・・
えっと、屋上？」

「イメージしたらさっさとやれ！」

トール容赦なし。

僕は慌てて歌う。

願いを込めて歌う。

遅刻したくないと切実な思いを込めて歌う。

2回目、ミス

3回目、ミス

4回目、光に包まれるも「やったと」思っ
て気を抜いたら光が消えた。

5回目、光に包まれて、重力が消えて
体が宙に浮いた！しかし、また油断して
ドスンと尻もちをついた。

6回目、ついに学校の方向へ瞬間移動
できた！！しかし、1メートルだけ……。つ
まり、僕が住んでいるマンションは6階で
あり、窓の外に飛び出してしまった！！な
んとか窓のさつしを掴み、事なきを得た。
(マジ死ぬかと思った)

7回目、僕の部屋の一つ上に瞬間移動
してしまった。やべつ、と思ったが、若い
カップルは熟睡していた。ラッキーと思
いつつも、まずい思いをしながらこっそり
と出て行った。(昨夜はお楽しみだった
らしい)

何度も失敗を繰り返した。ふと、時計
を見るとam8:55。後5分しか時間
はない！

そんな思いが後押ししたのか、僕は
歌を歌うとオレンジ色の光に包まれた。

僕は眩しいほどの光に包まれながら、
空高くを光の速度で飛び、学校の屋上で
減速した。ふわっと止まった後、体に重
力が戻り、1メートル上から尻で落下し
た。かなり痛い……。

「いったった・・・。」

僕は周りをきよろきよろし、周りに広がる青空を確認した。

「凄い、成功だ。」

僕はガッツポーズをとる。

「徹。早くした方がいいんじゃないか。」

トールの声にはっとなる。僕は尻をさすりつつ、急いで教室へ向かう。

しかし、

「か、鍵がかかってる！！！」

僕は悲鳴を上げた。普通に考えれば屋上の扉に鍵がかかっているのは当たり前だ。

トールはあきれてため息をつき、僕はドアにしがみついた。僕は声を張り叫ぶ！

題名 早くあけろ！

作詞 田中 徹とある

作曲 田中 徹

歌 田中 徹

早く開けろ！バカ野郎ー、この野郎ー

とつと開け！バカ野郎ー、この野郎ー

早く開かないとぶっ壊すぞ？

とつと通さないと押し通るぞ？

地獄の門番くそくらえ
神界の番人ふざけるな
お前らなんて知ったこっちゃない
俺は通るぞ！？
今すぐ通せ！！

鍵があっさりと開き、僕は駈け出した。

「すげえ、即興で開封の魔法を使ったよ。人間切羽詰まるとなんでもできるんだなあ。やはり、徹には魔法の才能が底しれないなあ。」

トールはあきれたような、感心したようにつぶやいた。

地獄の鐘が鳴り響く中、僕は走る。

チャイムが鳴り終わる前に、僕は教室に滑り込む。

先生は既に教室にいて、出欠をとろうとしていた所らしく、ぎりぎり僕は間に合った。

「ふー、ぎりぎりセーフって所かな。」

先生は走り込んできた僕にビックリしているのか、僕をボケっと見つめている。クラスメイト達も僕を見つめている。

ぎりぎり入ってきたのにビックリしたのかなと僕は不安に思う。

（やっぱり、まずかったかなあ）と僕が思った時、先生が僕に声をかけてきた。

まるでこの世にあり得ない物を見るかのような顔をして先生は、

「田中君・・・だっけ・・・、君・・・制服はどうしたの？・・・
パジャマ着てるけど・・・？」

僕の顔は盛大に歪み、すっとんきよな声を上げた。数十秒後、
ラスの盛大な笑い声が僕をやさしく包み込んだ・・・。

第3唱 急が場走れ！（後書き）

おとなしい徹が魔法は大成功、人生は大失敗してしまいます。徹が成長するのをやさしく見守ってください。

第4唱 選択とは他の道を捨てることである！（前書き）

徹もクラブ活動を選ぶようです。皆さんはクラブ活動はどうでしたか？ちなみに僕は将棋部でした。

第4唱 選択とは他の道を捨てることである！

僕は12年間のまだ短い人生で一番の大失敗をしてしまった。

この失敗を取り返すことなんて不可能である事は当然分かっている。

後悔とは「後に悔いる」と書くもので、それは決して取り返しがつかないのだ！！

・・・・・・・・まさか、中学生になってパジャマで登校スルトハ・・・・・・・・。

マンガの中でしかないと思っていたが、本当に僕がヤッテしまうとは・・・・・・・・トホホ。

僕が茫然としてみると、先生が「とりあはず出席とるから座りなさい。」と、戸惑いつつも声をかけてきた。

先生には「生徒がパジャマで登校してきた時のマニュアル」など知らないのかもしれない、いや、知るはずがない！制服を着ていないが、校則違反なのかどうか見当がつかない。

みんながにやにや笑う中、僕はとぼとぼ席に向かう。

（きつと・・・裸足でドラ猫を追ったサ・エさんもこんな気持ちなのかもしれない・・・ちつとも笑えない。笑うのは赤の他人だ！嘲笑しているんだ！）

と、僕はどうでもいい事に腹をたてる。

席につくと、前に座るかっこいい空手少年こと清水達也君が輝く白さ、驚きのさわやかな笑顔で、

「災難だな、田中。俺はジャージ持ってっから貸してやろうか？」

と助け舟を出してくれる。ありがたく、ありがとうとお礼を言い、僕は情けない笑顔を返す。

朝のホームルーム後、僕はトイレで清水君が貸してくれたジャージに着替える。僕は誰も見ていない事を確認して鏡に向かう。

「トール、僕がパジャマだって事を教えてくれてもいいのに・・・」

僕はボヤク。

「知るか、んなあこつたあ。自分の失敗を俺に愚痴るな。」

トールは相変わらずキツイ。

「はあ・・・こんな失敗して、この先の僕の学校生活は大丈夫かなあ。」

僕は深いため息をついた。

「まあ、今朝のお前の魔法はなかなかのものだったぞ。この調子で魔法の腕を磨いてくれ。」

トールは他人事の様だ。

僕はその後、清水達也と丁寧につけられたゼッケンを背に授業を受けた。

――放課後――

僕は気分どん底な状態で先生に寝坊して遅刻した事を報告した。

先生の名前は峰高春奈みなたかはるなととてもかわいらしい名前で、とてもかわいらしい顔つきでたばこをスパスパしながら書類を書いた。

（この人マズインじゃないの？天然？）

僕は意識の外に追い出した。

「田中君は夜更かしをしているの？それとも食生活が偏ってて、朝に弱いのか？生活習慣は改めた方がよいよ。」

先生は優しく諭す。

「いえ、春休みで油断していただけです。」

僕は先生のたばこから必死に意識をそらした。

「そつか、てつきり先生は田中君が内気で、引つ込み思案で、神経質なせいで、学校生活のプレッシャーで眠れなかったのかと心配したけれど大丈夫なのね。はい、ご報告御苦労さま。」

先生はほほ笑む。先生は天然なのだと、天然であつて欲しいと僕は願った。

僕は一度教室に荷物を取りに戻ったが生徒のほとんどが帰宅、又は部活動見学に行ったようだ。残っている女子数人のグループがどんなクラブにしようか話していた。

（僕はどんなクラブにしようかな？）僕は思案する。

部活動は友達を作るのにとっても重要だ。部活動で一緒に行動する事で引つ込み思案な僕にも友達を作るチャンスはある！・・・はず？

そこで友達を作るための秘策！

友達を作りやすい条件とは！

部活動仲間＋クラスメイト＞部活動の仲間　クラスメイト＞他の
クラスメイト

これは僕が発見したBlend^{フレンド}の定理だ！（この後、英語の授業
で間違いに気がつくが、それはまた別の話）

しかし、これには大きな壁が立ちふさがる。

僕は運動も音楽も芸術や他の事にも興味が薄い！僕がずっと続け
られるクラブは何があるのか？僕にもわからない。僕はうなって思
案していると、

『トール、くらぶってなんだ？』

トールは僕の頭の中に直接話かけてくる。

「みんなでスポーツや芸術や趣味などを楽しむことだよ。」

僕は誰にも見られないようにそっぽを向いて小声でつぶやく。

『剣術や武術、芸術音楽を学ぶって事か。・・・とおる、お前
は歌唱隊に入れ！』

「えっ、どうしてそうなるんだよう。そんなの無いと思うけど。
僕はばやく。」

『お前には歌を洗練して、魔法を上達してもらわなければ困る。』

「僕の学校生活を大きく左右する事を勝手に決めないでよ。」

『どうせお前は自分のやりたい事が無いくせに生意気な！自分の

やりたい事をいっちょまえに見つけてから俺に意見しろ！』

トールの言葉に僕はグサツと心に染み渡った。

気力が萎えた僕は帰宅する事にした。まず朝あわてて開けてしまった屋上の鍵をかけておく。僕はふと思いついた、

「登校した時みたいに家に瞬間移動できるかな？」

僕はためしに 家に帰りたい という願いを込めて【遅刻しちゃうよ】を歌った。

効果はいまひとつのようだ。

また歌ったものの、また失敗した。

「うまくいかないなあ。」

僕はため息ついた。トールはバカにしたようにため息をついた。

『その歌はお前が学校に遅刻したくないと願いを込めて歌った歌だ。それでは《家に帰りたい》との願いを込めにくいんだ。面倒がらずに新しく歌を作るんだな。』

徹はうなだれる。

「はあ、メンドーだなあ。新しく魔法を作ってみるか。」

題名	メンドー・メンドー
作曲	田中 徹
歌詞	田中 徹
歌	田中 徹

2本足で歩くのメンドくさい

勉強なんてメンドくさい

朝起きるメンドくさい

使命義務なんてメンドくさいのに

人生楽だけあればいい

山は登らずふもとで昼寝

「苦労」て、言葉はなんだっけ？

何でみんなせわしく歩くの？

何でみんな必死なの？

今日だけ楽しんで良いんじゃない？

毎日いそいそ疲れちゃう？

メンドーな事が勝手に済めば良いのに

メンドー事が無ければ良いのに

今日はお休みグッナイ？

僕はこの歌を画期的だと思った。

これで魔法を使えば面倒な事が済んでしまうのだから。

家に帰るのも、宿題も、さまざまな面倒な事がこの魔法一つで解決なのだから。

徹は【メンド・メンドー】を唱えた。《テュルルルル》（効果音）
《徹のため息が2倍に上がった。トールのあきれ度が2倍に上がった。》

．．．．．つまり、魔法は発動しなかった。．．

『徹、世の中そんなに甘くない。それじゃ面倒な事が嫌だなどの思

いを込める事ができても家に帰りたいとの思いを込めづらい。きちんと家に帰る魔法を作れ。』
トールは冷たい事を言う。

僕はがっくりしていると、階段の下から足音が聞こえてきた。
僕はギクツとした。あんな恥ずかしい（一応自覚はある）歌を聞かれたら穴にひきこもりたくなる。階段を上がってきた人物は、

「田中・・・君？　今、歌っていたのは？」

同じクラスメイトの女子だった。

「う、うん・・・そうだよ。」

僕は顔を真っ赤にしながら答える。僕は逃げ出さなくなったが逃げられない。

「ユーモアたっぷりな歌ね。声もそこそこ良かったわよ。」
彼女はくすくす笑いながら答える。

「えっと、たしか・・・君は杉山薫さん・・・だよな？」

「そうよ。所で田中君はクラブなににするの？」

「えっと、まだ決めてないんだ。」

「じゃ、コーラス部はどう？私これから見学に行くの。もし歌うのが好きだったら一緒に見学しない？他に見学する子が見つからなかったんだ。」

彼女は少し嬉しそうに笑った。

「えっと、どうしようかな？」

『徹とおる、コーラス部とは歌を歌う歌劇団みたいなものか？』

「（小声）そんなもんだよ、話しかけないで。」

僕はトールに呟く。

『ならやれ、直ぐやれ。直ちに、速やかに、迅速に！』
トールが頭の中で怒鳴り、僕は頭痛がした。

「ん？田中君どうかしたの？嫌なら別にいいんだけど。」

「そんな事ないよ、見学してみようかな。ただ男子生徒もいるかどうか気になっただけ。」

僕はあわてて取り繕う。そんな僕に彼女はクスクス笑った。

「確かにそれは気になるよね、周りに女の子しか居なかったら。でも、それを目当てにきそうな男の子も居たりして。」

「僕はそんなつもり無いよ。」

僕はまた少し顔を赤らめた。

そして僕は杉山さんとコーラス部を見学しにいった。

コーラス部は音楽室にある。

音楽室は吹奏楽部が使っているのではないかと思ったが、杉山さんの話だと吹奏楽部は第二音楽室という名の吹奏楽部専用の練習場所あるらしい。そっちの方が広く、きちんと練習できるらしい。中学生の音楽などピアノとリコーダーと人の声があれば十分である。そんな訳で音楽室に向かうことにした。

僕はため息をついた。確かに他にやりたい事がないが、コース部も正直に言っていると気が重い。他に選択肢はあったかもしれないかもしれないが、他のクラブを選んでも結局後悔しそうな予感がする僕はおとなしくコース部の見学に行った。

第4唱 選択とは他の道を捨てることである！（後書き）

ピンチ！僕は正直コーラス部についてよく知りません。適当に無茶苦茶にしますがつつこまないでください。

第5唱 帰りたい場所（前書き）

トールと徹の絆がほんのわずかにだけど、できる話です。

第5章 帰りたい場所

僕と杉山さんは音楽室をノックして「失礼します」と挨拶して入った。

「いらっしやい。どうぞ入って。」

僕たちを迎えたのはおさげの髪型の2年生だった。彼女はほほ笑み、1年生が来た事を素直に喜んでいるようだ。

「入部希望者？」

「とりあいず見学です。」

杉山さんが答える。

「いいよ。見学者も大歓迎。」

僕が中を見渡すと9人ぐらいの上級生がいた。リボンやネクタイの色柄で何年生か判断でき、1年生の女子が3人、男子が2人いて、少し僕は安心した。

「よし、結構集まったし自己紹介でもすつか。」

髪を茶髪（規則違反？）の3年生女子がみんなに声をかけた。

「うちは3年の真田鋼^{さなだはがね}や、コーラス部の部長を務めとる。よろしくや。」

がははと笑いながら自己紹介した。

（《あかね》とかは女の子によくあるけど、《はがね》は全く聞かないな、ゴロは似てるけど。でも、まあピッタリな名前かもなあ。）

僕は心の中で思った。

入った時迎えてくれたお下げの先輩は田島恵子さん。たじまけいし一年生男子について、めがねをかけるのは佐藤渡君。さとうわたるスポーツが上の下っぱい人が下田登君。しもたのぼる1年女子3人が順に鈴木、渡辺、高木さん。以下はメンドーなので省略。

（後でしっかりとメモして覚えなくちゃ。友達づくりには名前を覚えるのが基本だしね。）

僕は出来る限り覚えようとした。

鋼先輩が手をたたく。

「はい、コーラス部の説明をすんで。コーラス部は2学期に一度だけ大会に出、学際にも発表し、基本的に全体練習は週に2度や。」

ずいぶんとコンクールが少ないなと思った。他の1年生も思ったように、その質問がでた。

「ちなみに、うちの部活は演劇部と共演してミュージカルを学校でやったりするんや。演劇部部长を脅し、・・・いや、共に協力して文化祭とかの時に学校でやるんや。」

（もしかしたらこの部活はミュージカルがメインなんじゃないかな？部長は関西の人っぱいし、宝塚のファンなんじゃないのかな？）

『とおる、みゅーじかるとはなんだ。』

（歌いながら物語を演じる事だよ。話かけないで。）

『やっぱりこのクラブで決まりだ、徹。』

僕とトールは頭の中で会話する。なんだか慣れてきている自分が気持ち悪い人種のようなのだ。

「じゃあ、コーラス部に入ろうや、全員名簿に名前電話番号を書いてきや。」

（全員入部する事確定かよ。まあ、僕はトールがうるさいから入るけど・・・。）

1年生全員が名前と電話番号を書いた。杉山さんは女子3人と話をしている。

僕が突っ立ると1年男子2人がやってきた。

「お前は田中だよな、お前も女子目当てで入部したのか？」
スポーツ上の下っぱい下田君がにやにや笑いながら声をかけた。

「下田、他に理由なんてあるわけないだろ。」

メガネ君もにやにやしながら言った。二人は3組らしい、ちなみに僕は2組だ。

「そ、それもあるかな？あと、歌も上手になりたいんだ。」

僕は少し引き気味になりながらもそれを隠して二人の会話に合わせた。

（歌といえば、今頃「あいつ」どうしてるんだろう？）

ふと僕が小学生の時の友達を思い浮かべていると、1年女子4人が来た。

「君たちはどうしてこのクラブに入ろうと思ったの。」

女子にしては凛々しく、宝塚ッぽい鈴木さんだかなんだか（あいまい）が聞いた。

「俺、カラオケとか好きなんだよ。」と、メガネ。

「なんだかこの部活、ぶっ飛んでて楽しそうじゃん。」と下田。

（二人ともかつこつけて。まあ、ぶっ飛んでるのは確かだけど。）

「じゃあ、田中君は？」

僕が心の中で突っ込んでいると僕に話が振られた。

「いや、歌も上手になりたいし、小学校の時の友達は歌うのが好きだったから。」

「へえ、その子どんな子？男？女？」

「お、おんな・・・の子だよ？」

僕は戸惑いながら答えると。

「・・・きゃー！」「・・・」4人は声を上げて笑った。「もしかして純愛？」とか女の子の輪の中で話が盛り上がっているようだ。女の子の恋愛思考回路は男の子よりも五十歩百歩（使い方が間違い）先を考えるので僕には理解できない。

ちなみに男の子二人は「何こいつ？なんでこんなに女の子に騒がれてんの？」というような顔をしている。

そんなつもりは無いのに、はあ。僕は一人ため息をついた。

今日はおしゃべりして終わったが、余談、部長は元演劇部で「うちミュージカルをやりたい！」と思い、演劇部では実現難いのでコーラス部を作り、共演という形で押しこんだらしい。つまり、部長は無茶苦茶な人だということだ。

ちなみに、女の子に騒がれた事がそうとう男二人は悔しかったのか、帰り際に「じゃあね、清水君」と僕をからかった。（清水君からジャージを借りているのだ、制服が濡れた事にしたが、パジャマで登校した事がばれるよりはマシだ。）

みんなとは帰る方向が少し違うようなので、一人で屋上の前の扉にきた。家に帰る魔法を作りるつもりだ。そうすれば一人で遠出した時、楽だし電車賃もいらぬ。

「ねえ、ツール。ツールは瞬間移動にどんな歌を歌っているの？僕に教えてくれない？」

『魔法を使う際の歌は、自分が願った事を歌に込めやすいように歌を作るんだ。俺が作った歌がお前に使える可能性はほとんどない。苦労して自分で作れ！』

僕はため息をつきながら考えた。

（僕は家に帰りたい。僕は家に帰りたい。僕は家に……。）

僕は願いを膨らませていったが、それは萎^{しほ}んでいった。

仕事でなかなか帰らないお父さん。

もう、幼い頃の記憶でしか会う事のできないお母さん。

誰も「お帰り」とは言ってくれない、一月半前に引っ越してきたマンション。

前に住んでいた家もきつと取り壊されて、もしかしたら新しい建物になっているかもしれない。

幼馴染は4年生の時、歌手になると言っ、都心に引っ越してから連絡も取り合っていない。

僕が帰りたい場所とはなんなのか。

きつと、今すんいるマンションではないと思う。

きつと、帰りたい場所は過去が存在。

恐らく、僕は家に帰る魔法は使えないと思う・・・。

僕は歩きだした。魔法を作ろうとしたって、きつと無駄だから。

僕はツールが魔法を練習しろと言ったが、ツールはそんな僕に対してただ黙ったまま・・・。

今は鏡を持っていない僕には、ツールがどんな顔をしているのか分からなかった。・・・。

僕はマンションに着き、家のドアを開けた。

「ただいま。」

僕は呟くように言った。

もちろん「おかえり」との挨拶は返ってくるはずがない。

しかし、突然返事がした。

『お帰り』

トールが僕の頭の中で言った。

「なんでトールが挨拶するの？僕の中にいるのに？」

僕の疑問にトールは気恥ずかしそうに、

『じゃ、お前はなんで「ただいま」って言ったんだよ。』

「えっと、・・・なんとなく。」

『じゃあ、俺もなんとなくだ。』

「そつかあ、なんとなくか、ははは。」

僕は力なく笑う。

でも、なんだか少しだけ、気が楽になったような気がした。

第5唱 帰りたい場所（後書き）

今回は魔法なしで残念でした。ちなみに幼馴染との再会で話が転回していくつもりです。でもそれはまだ先の話のつもりです。

第6唱 好敵手（ライバル）が自分の成長につながるとはかぎらない！

「ふぁー、ちょっと早く着きすぎちゃったかな？」

僕は席に着きながらあくびをする。昨日のように遅刻しないため、40分前から瞬間移動魔法の歌《遅刻しちゃうよ》を歌ったため、かなり早く着く事ができた。まだホームルーム30分前だが、そろそろみんなが登校してきてもいい時間だ。そんな事を考えながらぼんやりしていると、清水君がやって来た。

「おはよう。」

「おはよう、田中。お前、今日は早いな。昨日の事、かなり懲りたのか？」

「昨日の事はあまり追及しないで！あれは僕の黒歴史の中で一番の出来事だよ。」

清水君はにやにや笑いながら、僕は少し照れながら彼のジャージを返した。

昨日はとても恥ずかしい体験をしたが、こうして清水君と仲良くなるきっかけみたいのが出来た。これを機に、友好関係を広げていこうと思う。

「ところで清水君も朝早いね。部活でもしているの？」

「ああ、空手部の朝練をしたんだ。空手は技も大事だけど、体格・体力も同じくらい大切だからな。早めに鍛えといった方がいいだろう？お前はどんな部活に入るんだ？」

「僕はコーラス部に入ろうか考えてる。」

「へえ、珍しいな！てっきりコーラス部って女子ばかりだと思ってた。」

「うん、まあ成り行きで見学したんだ。なんだかミュージカルもやるらしい、ちょっとおもしろそうだからね。」

「コーラス部でミュージカルか。面白いぐらいにぶっ飛んでいるな。」

二人で笑いながらそんな話をしている内に、みんな集まって着て、ホームルームの時間になった。

「はあい、みんな。この近くで、不良にたかられた事件が起こったらしいから、みなさんも気をつけるんですよ。いいですね？」

先生はニコニコ可愛らしい笑顔で、何の心配もしていないかのような顔で注意を促した。^{つなが}

先生、そこはもう少し深刻な顔で話してよ。

僕は心の中でそう呟き、はあとため息をついた。何かのフラグが立ったような、嫌な予感がした。弱者の生存本能というのは結構するどいのだ。

（放課後）

僕は家に帰る事にした。コーラス部の活動日は今日ではなく、明日。

少し話をできるようになった清水君は空手部であり、一人で帰る事にした。少しずつ友好関係を広めていこう。

（清水君と仲良く話していた坂田君と厚木君が次のお友達ターゲットにしようかな）

そんな小市民な事を考えながら下駄箱にいくと、3人の男子がいた。なにやらこそこそ話している。僕は自分の靴に履き替えようとしたら、3人が声をかけてきた。

「おい！お前が田中徹とおるか？」

「そ、そうだけど。君たちは誰？」

僕は三人に答える。3人はもの凄く僕を睨みつけている。

3人はそれぞれ名乗るも、外見と名前の説明は面倒なので割愛させてもらって、『チビ』『デブ』『リーダー』と呼ばせてもらう。「ふざけんな！誰がデブだ！割愛するな！俺の名前は草や・ピー（効果音）。おい！名前ぐらい出させる！」デブは上に向かって喚く。

チビは目を丸くして、誰に怒っているの？みたいな顔をしている。僕もさっぱりだ。

そこでリーダーはデブを無視して、僕を睨みつけながら声をかけてきた。

「お前、コーラス部に入ったのか。」

「え？まあ、そうだけど。」

「コーラス部に入るとはお前は女好きなんだな！学校には遅刻してパジャマで登校してくるし。このバカ野郎め！」

いきなり罵倒されて僕はビックリした。リーダーは顔を赤くして、鼻息が少し荒くなっている。僕には訳が分からない。

「あの・・・いきなり怒られてもサッパリなんですけど・・・。どうしてそんなに怒っているんですか？」

「ふん、お前が知る必要はない。」

僕が知る必要ないって・・・、そしたら僕に何を求めているんだよ！
（心のつつこみ）

「そうだ！『リーダー』（本当は名前をいつていますが、作者が勝手にあだ名に変換しています）が小学校の時から杉山さんへの思いを密かに隠し、それをいいことに、お前が杉山さんに近づくから俺たちがお前に制裁を加えにきたんだ！お前は理由も分からず黙って制裁を受けていればいいんだ！」

いきなり、チビがリーダーの秘めたる心をとて丁寧な解説付きで僕にぶちまけ、リーダーがチビを殴り黙らせる。昔のコントみたいだ。

そんな秘めたる心を初対面の僕が知っているはずが無いし、そんな心を僕にぶちまけられても正直迷惑だ。どうせなら本人にぶちまけて欲しい。お願いだから部外者の僕を巻き込まないで！

「ふん、お前が俺の秘密を知った以上、お前を無事では済まさない！」

（お願いだから、勝手に秘密をばらして、勝手に巻き込んで、勝手に怒らないで！）

「あの、杉山さんはクラブの仲間なだけで、別に僕はそれだけなんですけど?。」

「ふん、言い訳をするな! 問答無用!。」

うん、確かに、3人は初めから僕の意見なんて聞いてないね。

『おい、徹とほ。この3バカを黙らせてやろうか。』

「（小声）ツール、ややっこしいから口出さないで。」

「何をばそぼそ言っているんだ! もっとはっきり言え!。」

『お前の体を少し借りるぜ。』

（えっ? 体が勝手に!）

ツールが僕の体を支配する。

「（ツール）賢者の必殺技! 賢者ストレート!。」

ツールがリーダーの顔面に向かって右こぶしを寸止めた。リーダーがこぶしを受け止めようとした瞬間、ツールは後が残らない程度に手加減して、股間を蹴り飛ばした。リーダーはおもわず股間を抑えてうずくまる。

（滅茶苦茶ヒキョー! 金玉蹴られたなんて恥ずかしくて人には言えない! ある意味賢者だ! ……って、人の体でなんて事してくれるんだ!）

僕は心の中で叫ぶ。ツールに体を支配されていなければ大声で叫

んだだろう。ちなみに、この小説で記念すべき最初のバトルシーンが金蹴りという結果になった。

「リーダー！！」チビが駆け寄り、リーダーの背中を叩く。その方法はノドに物を詰まらせた時の対処法であり、金蹴りされた時の対処法ではない。デブの方は話が長すぎたのか、立ったまま、うつらうつらしている。

ツールからの支配が解けた瞬間、僕は脱兎の如く走り去った。こつ門を出ようとしたら黒猫とその3匹の子供に横切られた。なんだか嫌な不吉な予感が深まった。

偉大なる賢者様のお心のおかげで、大きな試練ができたようです。僕は、明日学校でどうなるの？

上手く3人に出くわさないように行動しないといけないではないか！

第7唱 勇気とは、誰もが持っているが、それを示すのは難しい！（前書き）

僕の自信な処女作なのに、おもしろ半分で作った「最弱勇者とチー
トな勇者御一行様」よりアクセス数が少ないのはショックです。

第7唱 勇気とは、誰もが持っているが、それを示すのは難しい！

僕はコント・トリオ（勝手にユニット名をつけました）から逃げて帰路に着いた。

「はあ、ああいう人たちは苦手だなあ。」

僕はため息をつく。

『そうだな、俺は賢者としてそれなりに世の中の事を悟ったつもりだったが、この世は多くの神秘で満ち溢れている。・俺もまだまだ修行がたりないな。』

コント・トリオは偉大なる賢者様に神秘の物の扱いをされました。僕はトールの言葉にクスクス笑った。

「何だー、テメえー。俺達の事をオチヨくってんのか！」

大きな怒鳴り声に僕はビックリした。クスクス笑ったのが悪かったのか。一難去つてまた一難とはこの事でしようか？

僕が首をぶんぶん振り、当たりを見渡したが・・・誰もいない。

「出すモン出してよう！ドラ●もん！」

ヒヤハハという笑い声が聞こえる。

『とおる、あつちだ。路地裏。』

トールの言葉に従って、路地裏を覗いてみた。すると、ガラの悪い高校生らしき不良3人が、まるまると太った中学生を囲んでいた。中学生は怯えて今にも泣きそうであり、良く見

ると僕と同じ制服だった。

『はあい、みんな。この近くで、不良にたかられた事件が起こったらしいから、みなさんも気をつけるんですよ。いいですね。』
みなたかはるな
峰高春奈先生のかわいらしい、のんきな注意が頭の中に響いたような気がした。

（何だ！このマンガのような展開は！実際にあるのかあ！ど、どうしよう！）

僕は声一つ出せなかった。

『助けないのか？』
ツールが問う。

僕は恐怖で足が動かせなかった。
警察を呼には電話が必要だが、携帯はまだ持っていない、近いうちに買ってもらう予定だった。となれば、近くにいる誰かに連絡してもらう他ない。すぐそこにコンビニがある。そこまで行けば警察を呼んでもらえる。

しかし、怖くて上手く体が動かない。

3人の内の一人は見張り役なのか、ふと後ろを振り向こうとした。

僕は思わず逃げ出してしまった。
警察を呼ぶ事なんて考えずに
自分の事すらよく考えずに
ただ、ただ、恐怖で逃げ出した。

結構な距離を走り、息が切れ切れになって、ようやく僕は立ち止まった。

僕は・・・、ぜえ、・・・最低だ・・・。

息を切らしながら、そう呟く。

『まあ、仕方ねえんじゃねえの？お前の実力じゃ3人相手にできねえし。近くに衛兵も居なかったんだから。お前が出しゃばっても、カモが増えるだけだ。』

トールは落ち込む僕に、あきれた様子で声をかけた。

「でも、僕の所では警察、その、衛兵みたいなのはすぐに呼ぶ事ができるはずだったんだ。でも、僕はそうできなかった。」

『ふーん。つまりお前が最低な意気地なしって事か。そういえば、バカトリオにからまれた時、何も言い返さなかったしな。』

トールの言葉に僕はさらに落ち込む。
まさにその通りだ・・・。

次の日、僕は学校に行った。

昨日の事が頭から離れず、僕の友達の輪を広げる作戦は進まなかった。

コーラス部の初の活動もあまり身が入らなかった。

部活が終わって、僕は一人でとぼとぼ帰り道についた。

帰り道、コンビニで肉まんの新商品があったので、コンビニでジャンプ、サンデー、マガジンをまとめて立ち読みし、肉マン一つ買って出た。（コンビニは大迷惑！）

袋から出して肉マンにかぶりつこうとしたら、急に黒い影が迫ってきて、肉マンをかつさらった。

僕が驚いて尻もちをついた目の前に、昨日の黒猫がいた。子供3匹も一緒だった。

僕はよほどぼんやりしていたな。はあ……。

人の手にある肉マンをかつさらうとは、よほどお腹をすかせていたのだろう。

（しかし、甘い！その肉マンはアツツ、アツツなのだ！）

予想通り、黒猫は銜^{くわ}えていた肉マンを離し、フシャーッと警戒している。

そんな様子を見て、また、はあとため息をついて僕はコンビニに戻る。

僕はコンビニでソーセージを買った。

「ほらよ。食べれば。」

僕は黒猫親子にソーセージをやった。黒猫親子はソーセージにかぶりついて食べた。

尻尾をピンと立てながらガツガツ食べる姿に少し癒されながら、僕は昨日の事をまた思い出していた。

きっと、昨日の罪悪感ゆえに、僕はこの黒猫親子にソーセージをあげたのだろう……。

どうしたら勇気を出す事ができるんだろう。

僕はこんな弱虫なまま過ごしていくんだろうか。

「弱虫なままなんて・・・僕はいやだ。」

僕の呟きにトールは

『なら、勇気の出る魔法を作ればいいじゃないか。』
と、言った。

「ヘッ・・・そんな都合のいい魔法あるの？小説でも聞いたことない。」

『馬鹿、魔法は祈りを込めて、歌を歌う事で、力を発揮する。つまり、人の『何かを願う心』こそが魔法となるんだ。現実を捻じ曲げる魔法よりも、人の心に届け、心に働きかける魔法の方がずっと簡単だ。お前は心から勇気が欲しいと願っている。ならば歌え、その心を歌にするんだ。』

「うん分かったよ。」

トールの言葉に僕は元気がでてきた。

『ついでに、少しでも幸運になる魔法もミックスしたらどうだ。自分分は幸運だと思つと自然と勇気が湧くものだ。』

僕は静かに目を閉じ、心の中の願いを膨らませる
弱虫な心を克服したいと願う

しっかりと自分の心を貫きたいと願う

これはずっと前から自分を変えたいと願ってきた事だ
絶対にこの魔法を成功させて見せる

題名：一握りの勇氣

歌詞：田中 徹

作曲：田中 徹

歌手：田中 徹

君が目の前で泣いているの見て

僕の心は痛む

君の涙がふるえるたびに

僕の心もふるえてしまう

本当は君に優しくしたいのに

僕の心は迷う

君に手を差し伸べようとして

僕の手が傷つくのを恐れる

ほんのわずかな

一握りの勇氣が欲しい

君のもとへ駆けつける足が止まらないように

ほんの少しの

一滴の幸福が欲しい

僕のさしのべた手が君の手を握れるように

きっと誰もがそう思うはずさ

きっと誰もが優しくしたいはずさ

だからこの歌に勇氣を乗せて

どこまでも届いて欲しい

世界中のどこまでも・・・

僕は歌った。

あの時、路地裏で助けられなかった事を悔やみながら

勇気が欲しいと渴望しながら

弱虫な自分を乗り越えたいと願いながら

ちなみにドラ●もんと呼ばれてた、太つちよ中学生を、僕の脳内で幼馴染に変換しながら歌った。（感動的な歌を歌いながら、何気にひどい事をしている）

（でも、これで勇気が出たのかな？）

僕は目を閉じたまま、ふと思う。

『なら目を開けてみるといい、とおる。』

トールの言葉に目を開けてみると、なんと10人近くの人が手をたたいていた。

「坊や、歌手目指しているの？とってもいい歌だったわよ。」

「中学生にははなかなかだったぞ。」

「いい歌声だった。もっと練習すれば、立派な歌手になれると思うよ。」

そう口々に褒めて、僕に硬貨をにぎらせてくる。

「ねえ、他に無いの？」

おばさんが聞いてくる。

「えっと、じゃあ・・・。後はコミカルな歌だけですが、もう一曲。」

僕は今まで、魔法のために作った歌を歌った。

「坊主、お前の歌に大満足だ。コミカルのも面白かったぞ。」

「新作出来たら、また歌ってね。」

10人位の人達が、僕にお金を渡して行ってしまった。

「僕、どうやらミュージシャンと間違えられたようだね。」

『まあ、魔法が知られていない、この世界。まさか魔法を使うために歌っているとは思わなかったんだろうさ。』

「そうだろうね。でも、さっき勇気が出たかどうか、どうやって確かめるの?」

『さっきの人達、お前の歌を聴きにきただろう。玉なしの弱虫なお前じゃあ、きっと逃げ出しているだろう?でも、お前はリクエストに答えて歌った。勇気が出た証拠なんじゃねえか?』

確かにそうだ。以前の僕なら上がって、逃げ出しただろう。これは勇気が出た証拠か。

「ん?なら、このお金は幸運の証拠?」

僕は十数枚のお金を握りしめて、首をかしげた・・・。

第8唱 何事もどうなるかは最後まで分らない！（前書き）

源氏物語の知識が少し違っていたので訂正しました

第8章 何事もどうなるかは最後まで分らない！

僕は少しだけ気分がいい。昨日まで悩んでいた事が少し晴れた。

勇気の魔法を使えば、弱虫な自分を少し克服できる。実際にそれを使うかどうかは分からずに、勇気の魔法を持っているというだけで自然と力が出るような気がする。例えるなら、初めて自転車を買ってもらった子供のようだ。自転車に乗れなくとも、それが在る事が誇らしいみたいだ。

単なる勘違いかもしれないが、勇気も心の問題である。何か一つ切り札が在る事は大きいし、例え勘違いでもそれが勇気につながるのかもしれない。

僕は清水君と、一緒に仲良く話している坂本君と西郷君と話に混ざろうとした。精一杯の勇気を振り絞って・・・。

「おはよう、みんな何はなしているの？」

「おはよう、田中。」「ちわー。」「よう。」と挨拶を返してくれる。

「（清水）AKBの話をしていた所。誰が一番かわいかった話。」

「（清水）柏木だ。」「（坂田）前田敦子」「（西郷）大島だ」

（柏木？ かつこいい名前。源氏物語の主人公の親友みたいだ。）僕はあまりAKBにあまり詳しくない。僕のおこずかいファンタジー小説や漫画に費やされるのだ。AKBはテレビに出てくるのを何回かみただけだ。でも、男子中学生が源氏物語を知っているほ

うが少数かもしれないが・・・。

「田中はどうだ？」

坂田君が勢いづいて聞いてくるので、思わず、

「前田。」

と答えてしまった。ガッツポーズを取る坂田をよそに、二人は

「どっちの前田？」

と聞かれてしまった。

（えっ、前田って、二人いるの？）

僕は地雷を踏んでしまったようだ。名前を間違えたら適当に答えたと思われる。

僕は汗をかきつつ、先程出た名前を思い出した。

（前田・・・、前田・・・、えっと確か・・・、）

「前田アツ子」

「『前田あつこ』だ！アツ子じゃ、まるで『和田あきこ』みたいだ！」

坂田君に怒鳴られました。ファンは強し・・・。

友達作戦は微妙にミスかなあ？・・・。

帰り道、僕はまた黒猫親子に会えないかなって？僕はキョロキョロしながら歩いていた。

食べている姿はともかわいかった。

（今日は、あの頭をなでてやる！・・・、でも、引っ掻かれそうだったらよしとこう。）

そんな事を考えながら僕が歩いていると、怒鳴り声が聞こえてきた。

「出すもん出せよ！ズッコケ3人組み！」

またですか……。僕ってどうして事件の遭遇率が高いのか？

『とおる、お前もやつかいな運命かもナ。お前に疫病神でも憑いてるのか？』

「賢者様は憑いているけどね。」

僕が軽口を返し、《ひとにぎりの勇気》を呟くように歌い、勇気と幸運の魔法を自分にかけた。しかし、魔法が効きすぎたためか、勇気が溢れ、警察を呼ぶ事を忘れて飛び出してしまった。

僕の足音に気付いた不良Aが振り向いた。

僕が年下の中学生だと気づき、「シッ、シッ！」と追い払うように手を振った。

不良3人が囲んでいるのは、時に神秘の物、時にバカトリオ、時にコント・トリオと呼ばれている（主に僕とツールが勝手に心の中で呼ぶ）デブ、チビ、リーダーだった（これまた僕とツールが心の中で勝手に呼ぶ）。

「やめなよ！人を脅すのは最低だし、物をねだっていいのは生活に困っている人だけだよ！」

僕はきっぱり声を上げる

「ああーん。坊やは偉いねえ。いい子だ。死にたくなかったら、どっか行け！」

不良Bが脅す。

僕は不良を睨みつける・・・。
コント・トリオは怯えている・・・。

『とおる、やっちまえ!』

トールは僕をはやしたてる・・・。

その場の空気に緊張が走った。トールを除いて・・・。
不良Cが3人を脅していたナイフをこちらに向けた。

「逃げるんなら今のうちだぞ!」

僕は両手を構える。実は一昨日、読んだマンガを参考にしただけである。

不良Bがこちらに歩いてくる。不良Cはナイフで脅すだけで実際に使うつもりは無いらしい。

「馬鹿な奴だ!こんな・、」(徹)賢者ストレート!」バブロマン
ツウ!!」

台詞の途中で、手加減なし、容赦なしの一撃! 必殺技の賢者ストレートが炸裂!

不良Bは股間を押さえて蹲る。^{うずくま}効果は抜群だああ!

滅茶苦茶痛そうだ。不良どころか、僕とくらった事のあるリーダーの顔まで青くなった。

僕の精神は、まるで必殺技ゲージを3本消費してしまったような感覚だった。それ程強烈な一撃だった。

仲間の戦闘不能な状態に呆けていた不良Cが、正気に戻り、こちらにナイフを向けながら歩いてきた。

しかし、僕の魔法が効いたのか、空から『幸運』が降って来た! 僕は急に上を見上げた。

不良も何かと思い、つられて上を見上げた。
カラスのフンが不良の顔を直撃隣の晩御飯！

「ああー！」不良が顔を擦る。目や口に入りかけたようだ。
「取ってくれ！」と不良Cが不良Aに頼むも、不良AはCから逃げる。

その隙に、僕とコント・トリオは逃げた。

「はあ、・・・はあ。・・・助かった、・・・」チビが息を切らしながら言った。

デブはすでに死んでいるかのように倒れている。

「全く死ぬかと思った。」

僕とリーダーの台詞がハモル。

「・・・ハハハ・・・」僕ら4人は顔を見合わせて笑った。

「怖かったなら、どうして手を出したんだ？」

「思わず手を出しちゃった。喧嘩は強くないけど。」

リーダーの問いに僕は答える。

「まあ、ありがと。」リーダーがそっぽ向いて言った。

「ありがと、でも、杉山さんの事とは別も・・・イタッ。」

チビがリーダーに殴られる。

僕とデブがくすくす笑う。

チビとリーダーもつられて笑う。

「疲れて、喉も乾いたし、カラオケでも行くか？」

リーダーの提案に僕は賛成した。

僕の友達の輪を広げる活動の教訓、『友達になるきっかけは何になるか分からない。』だ。

僕達が歌を歌っている最中、ツールが『声が低い』『声が割れている』『テンポがずれている』『腹から声を出せ』とか僕の頭の中で厳しい評価をしてくる。これじゃ楽しみづらい・・・。

カラオケ1時間はあつという間に終わり、僕は3人に別れを告げて帰った。

僕が気分良く鼻歌を歌いながら家へ帰る。

友達作り、収穫は3人、絶好調！

「フフフフ・・・」

不気味な笑いをしながら僕は歩く。

しかし、そんな気分も次の瞬間吹き飛んだ。

「チツ、今日はついて無いぜ。」「全くだ！なんだ、あの中学生、生意気な！」

そんな声が少し離れた所から聞こえてきた。

僕は思わず、声が聞こえてきた路地裏とは別の路地裏にひそんだ。見ると、今日会ったばかりの不良A、B、Cだった。

かなり怖くなった。今、見つければズタズタにされる自信が在る。しかし、彼らは僕に気が付かず去って行った。

僕は彼らが居なくなっても数分その場で固まっていたが、彼らが出てきた路地裏が気になり、おそろおそろ足を進めた。

何か嫌な予感が胸を埋める。

僕は冷や汗をかきながら路地裏に入った。

（何をしていたんだろう・・・。）

僕は薄暗い路地裏に目を凝らした。

路地裏の隅に何かがいた。

暗くて分かりにくかったが、3匹の黒い子猫がいる。僕がえさを上げた猫だ。

3匹の子猫に囲まれていたのは、その母猫だった。

その腹はそれなりに多くの血が出ていた。それは、体の小さな猫からすれば致命的な量だという事だった。

僕は頭が痛くなった。不良3人が腹いせいに猫を殺したのだろうか。信じたくは無いが、そう思うのは止められなかった。

これは僕の所為だ！と、そこまで行きすぎた正義感は持ち合わせていない。

それでも僕の心は、不良への怒りと、不良が猫を殺した原因の一つとなった自分の行動への悔やみでいっぱいだった。

（あの時、警察に連絡していれば・・・）

僕は殺された猫を見て、吐き気がしたが、吐く事は猫に失礼な気がした。

優しい人間ならば猫を埋めてやるのだろうか？

でも、僕には猫に触れる事ができなかった。

野良猫は何か病気を持っているかもしれない、直接触る事は良くないと聞いたことが在る。

なんだ、かんだと理由を付けるが、ただ単に死体に触れる事が恐ろしかったのだ。

生きていたものが、どんな理由で死ぬか分らない。
もしかしたら、僕は『死』そのものを恐れているのかもしれない。
た。

僕は近くの百円ショップで、小さいスコップと袋を買ってきた。

僕は歯を噛みしめた。

結局僕は弱い人間だ。

でも、猫達をこのまま放って置けなかった。

僕はまた《一握りの勇氣》を歌った。

袋に母猫の遺体を入れ、もう一つの袋に子猫三匹を顔が出るように
入れてやった。

僕は公園の木が沢山植えられている所に植えてやる事にした。

ここは蚊やその他虫が多くて、あまり人が入ってこないからだ。

少し地面が硬かったが、一生懸命に掘ったが、すぐに疲れてしまう。

僕は魔法を歌った。

題名 穴掘り

穴掘りホイホイ！

もぐらがホイホイ！

ザクザクと地面を掘るぞ

大切な宝を埋めるため

穴掘りホイホイ

ここ掘れ、ホイホイ

どんどん穴掘るぞ！

悲しみを埋めるため

心の宝物を埋めれば
それは未来への希望になる
心の痛みを埋めれば
それは未来では追憶になる

未来に喜びをもたらすため
過去の悲しみを思い出にするため
さあ、穴を掘ろう！
もう少し深くまで！

僕は歌い終えた瞬間に、フワツとした浮遊感に包まれた。

「へえ？」

ドシッ！ 僕は尻もちをついた。
痛みを堪えながら、僕は立ちあがった。

穴は僕の腰ぐらゐの高さまでであった。ちょっと穴を埋めるのは大変
そうではあるが、猫を埋めてやるには十分だ。

僕は母猫を、そつと穴の底に横たえてやる。

子猫たちがミィミィと悲しげに鳴いている。

僕は汗をびっしょり流し、彼女を埋めてやり、厳かに両手を合わせ
た。

トールは黙って何かを思っているようだったが、静かに口を開いた。

「俺は、この世界で魔法を使いこなせないが、この猫のために歌つ
てやろうか？魔法は使えなくとも、この猫の魂の平穏を祈る事ぐら
いはできる。」

・・・お前も俺の後に続いて歌え!』

トールが心を済ませる。

トールが心から祈りを捧げる。

傷つき哀れな魂よ

汝の故郷に今帰りし時

汝の魂が神の元へ旅立つ

その長き道のりが今始まらん

失われた物を放棄せよ

汝の魂の平穩のために

汝の魂が振り返らないために

汝の歩んできた道のりは

汝の翼を育み

その翼が汝の枷を解き放つ

その翼を持つて汝は光の道に行く

新たなる世界へと天を駆ける

僕はトールに続いて歌った。

いや、祈っていた。

トールの儼かな歌は分かりづらいけれど

その歌には心がこもっていた

魔法とは心からの純粋な祈りなのだと感じた。

きつと、トールの心がこもった祈りが、母猫を天国に送った、と僕は思う。

第8唱 何事もどうなるかは最後まで分らない！（後書き）

1週間ぐらいこのシリーズも最弱勇者シリーズを書く時間が足りないようです。

第9章 夢と理想は人生の道しるべである

「あ、こら。動かないでよ。上手く洗えないじゃなか。」

黒猫3匹がシャワーを嫌がり逃げ回る。

僕は一生懸命になって子猫を捕まえて、丁寧に洗ってやる。

親猫を埋めてやった後、僕は子猫三匹をマンションまで連れて帰って来た。この後、猫を引き取ってくれる人を探すかどうかは後で考える。でも、できればこの子達を飼ってやりたい思いも確かにある。

「この子達を飼うには、・・・管理人さんにはれちゃダメだよねえ・・・はあ。」

僕はため息をつく。いつまで置いておいてやれるかなあ、と思案する。

僕は洗い終わった子猫たちに、猫用の粉ミルクを用意してやる。

親子にソーセージをあげたが、食べるのは親猫だけで、子猫は少しかじったり、遊んだりしていただけだった。どうやら、まだミルクを与える時期らしい。

子猫がおいしそうにミルクを舐めている姿に心が和む。

『とおる、この猫を使い魔にするのか?』

トールの問いに僕は首を振る。

「このマンションで飼えるかどうか、まだ分からないよ。とりあえず、今は面倒見てやるだけ。」

僕はそんな風に考えながらも、マンガの使い魔みたいに人間の言葉を理解出来たら、こっそり隠れてもらったりして、管理人さんにばれずに飼えるかな?とも思った。

お父さんは5日後に帰ってくるから、その時までを考えておこう。ミルクを飲んだ猫達はうつらうつら眠そうだったので、古ぼけたクッションの上に乗せてやった。もちろん、少し離れた所に猫砂を置いておく、あっちこっちでされたらたまらない。

猫の世話に満足し、僕はマンガとかゲームとかファンタジー小説

とかに勤しんだ。無論、勉強の「べ」にも手を出さなかった。

（翌朝）

僕はiPodにセットしたアラムのアニソンで目が覚めた。最近スガシカオにはまっている。カラオケで歌うと声がかすれて歌うのが難しく、この前はツールにも駄目出しをくらった。

僕は寝ぼけながらテキストに朝食を取る。眠くても、朝飯を食べれば少しマシになる。

学校に行く準備ができた僕は、子猫たちにミルクを用意してやった。

寝ぼけているようだったが、ミルクの匂いにつられてトコトコ歩いてきて、ペロペロ舐める。その仕草に胸がキューンとする。

眺めていたいが時間が無い。僕は学校へ向かうとする。

「いつてきます。」

僕は子猫たちに挨拶をして、出かける。何年もの間、決してする事が無かった挨拶だった。

僕は歩いて学校に着いた。もちろん瞬間移動で登校してはいけない、という校則も無いし（そういう校則があったら驚きだ）、瞬間移動の方が早い。しかし、突如、学校の屋上に現れる少年が目撃されたら困る。僕はできるだけ魔法を使わないで登校するようにした。教室に入ると、まだ半数ぐらいの生徒しかいなかった。

「おはよう。」

「ちわー、田中。」コントリオのリーダーが挨拶に応えた。

念を押します。この小説の中で、登場人物はコントリオの事を名前で呼んでいます。

これからもコントリオの事をリーダー、チビ、デブと小説には書

くが、決して作者が名前を考えるのが面倒になったのでは決してない。ホントだよ。絶対だよ。」

「とおる、灰かぶり姫という芸名のアイドル知ってるか？」

「いや、シンデレラの事？そんなアイドル知らないけれど。」

僕は記憶を探りながら答える。なんだか昔のアイドル名みたいだなあ。

「シンちゃん可愛いぞ、萌え萌えだ。いじめたくなるぜえ。」

デブが答える。

どうやら、一部の人達に大人気のマイナーなアイドルらしい。恐らくシンデレラのシンなのだろうけれど、シンちゃんじゃ、某アニメキャラみたいだな

一般的な男性はAKB48のファン

一部のオタクキーな男性は灰かぶり姫のファンらしい。

「田中、知らねえなら見てみるよ。」

チビがPSPを差し出してくる。そこに録画した画像を移したらしい。

僕は画像を覗く。

白く、膝上までのスカートのドレスみたいな衣装を来ている。化粧も程良くきれいだ。彼女は笑顔で手を振った後、マイクを口元に持っていく。彼女のサクランボみたいな色の唇から美しい、天上の声を紡ぐ。

雌豚なんて呼ばないで

そんな目でみつめないで

私はかわいいだけじゃないの

私は我儘な女なの

目障りなんて言わせない

ずっとあなたのそばにいたいから

私はちよつぱり寂しいだけ
あなたのぬくもりが欲しいの・・・

「・・・・・・・・」

なんて自虐的な歌だ。最近はこの歌が人気あるのか？いや、一部の人間だけか・・・

コントトリオはにやにや笑いながら見ている。

そんな感想が浮かんでいるうちに歌い終わったようだ。最後に顔がアップで映る。

でも、その顔を見ていると、どつかで見たことがあるような気がした。

僕達と同じぐらいのこの女の子をどこで見たんだろう？ と考えていると、急に頭の中に小学生の幼馴染の顔が浮かんできた。

えっ、この子は、何だか安奈あんなに似ている！？

小学校の頃、僕と黄麻おうまと安奈はとても仲良しで、安奈が歌手になると言っていたのを思い出す。

しかし、この子が安奈だとしたら、これは安奈の理想とはだいぶ違うと思うんだけど・・・。

僕は目を閉じて、あの頃を思いだす。

（小学3年生の回想）

安奈は能天気なほど明るい女の子。黄麻は良く勉強をして、運動もそこそこな男の子だった。

僕と黄麻と安奈は学校が終わり、ランドセルを背負ったまま公園で遊んでいた。

3人はブランコでどこまで飛べるかをやっていた。今思うと結構

危なかった。

ブランコで遊び終わっても、ブランコに座ったまま御喋りをした。「私ね、いつかね、歌手になりたいなあ。コンサートを開いて大勢のファンの前で歌うの。テレビにだって出ちゃうぞ。」安奈が楽しそうに言う。

「そうか、アンナちゃんは歌うの、大好きだもんね。」黄麻も楽しそうに答える。

「へえ、すごいね。どんな歌を歌うの？」僕が尋ねる。

「うーんとね、みんなを元気にするような歌がいいな。ジーンと感動する歌もいいなあ。」

答えた彼女が少し考え込む。しばらくして、いい事を思いついたとというような顔で言った。

「ねえ、私達で歌を作ってみない？」

「おもしろそうだね。」

「でも、ちよつと難しそうだよ？僕達に作れるかなあ？急に何で？」僕はすぐに頷き、黄麻は疑問を口にする。

「もちろん、子供の頃に作った歌の方がデビューした時に話題になるでしょう？」

安奈は自信たっぷりに答える。

「へえ、アンナちゃん、頭いいね。」黄麻が感心し、

「アンナは計算高いね。」僕が感嘆する。

「とおる、それ褒めてないでしょ！」

彼女は笑いながら僕を拳骨で殴るまねをし、「へへへ。」と笑って僕も殴られるまねをする。

「未来の人気歌手の私があなた達に私の歌を作る手伝いという名誉な役を与えてあげる。」

安奈がふざけて笑う。

「ねえ、歌詞にどんな言葉を使うと良いと思う？」

僕と黄麻は考える。僕は思いついた事を言う。

「大航海、というのはどう？」

「とおる、それはもしかして、ワンピースの影響？」黄麻が笑う。
「いいじゃない、大航海。『人生は大航海』なんて、かつこいいと思うよ。まあ、『海賊王に俺はなる』なんて、歌にできないけどね。著作権に引っかかったちゃう。歌手を目指すなら気をつけなくちゃ。」

安奈はふざけた後、歌詞についてまた考えた。

「大航海か。他に何にしようかな？」

安奈がまたブランコを軽く漕いだ。

青空を眺めている内に何か思いついたようだ。

「『太陽と星は夢と理想、太陽と星を道導^{みちしるべ}にして、僕らは新大陸を目指して航海する』なんてどう？」

僕は首をかしげる。

「どうして、夢と理想が道しるべなの？ 夢と理想は目指すものじゃないの？」

僕の疑問に彼女は得意気に笑う。

「それはね、夢と理想ってさ、人が前に進むのに必要な物だと思うの。」

「どういう事？」僕はさらに首をかしげる。

「もちろん、夢とか理想は叶った方が嬉しいよ。でもね、どうしても叶わない事だって、きつとあるの。けどね、きつと夢とか理想を目指した分、自分の望む未来に少しは近づく事ができると思うの。」

「どうということさ？」

僕の疑問に安奈はじれったそうにした。

「だからね、人は夢とか理想が無いと、何処かへ目指そうとする事ができないの。きつと、立ち止ったままになってしまうの。でもね、夢とか理想を目指す事で、より幸せな未来に辿り着く事ができるかもしれないの。夢とか理想は、人生で未来を目指すための道しるべで、夢とか理想を頼りに前に歩いて行くの。太陽や星を頼りに新しい世界を目指すように。」

頭が混乱する僕を余所に、黄麻が納得したように答えた。

「つまり、人は幸せな未来を掴むために、夢とか理想を追い求めるでも、夢とか理想は幸せな未来を掴むためであって、夢とか理想が叶わなくても悲嘆する事は無い。夢とか理想を追い求め続ける事にきつと意味がある、って事かな？」

「黄麻くん、分かっているー。太陽と星が夢と理想で、新世界が私たちが目指す未来なの。」安奈が手を叩く。

「野球選手になりたい男の子はその夢を目標として未来に向けて頑張るの。『優しく、勇敢であろう』と理想を掲げる人は、それを目標として頑張るの。目標であって、それは目的ではない。私も歌手になろうと夢を掲げて努力をするの。」安奈が夢をみながら言う。

「えっと、・・・そっか、そういう事か！？ナルホドナルホド！？」安奈がジトツと僕を見つめる。

「本当に分かっているの？」

「ほ、本当に分かったさ。船で星に届かないなら、ロケットに乗ればいい。」

「もう、やっぱり分かって無い！」

僕達3人は笑う。

夢とか理想は未来を目指すための道しるべ・・・か。

僕は見せてもらった画像の中の彼女を見て、昔の事を思い出した。

「・・・おい、田中。聞いているのか。」リーダーが声をかける。

「あ、ごめん。何？」

昔作った歌を思い出せなかった僕はリーダーに返事した。

「この子どうだよ？」チビが聞く。

「うーん。一風変わったかわいいアイドルだね。」と、僕は無難に答える。

「そっだよな。ちょっと変わった所が良いよな。」デブが賛同する。

僕はうなずいて思案する。

この子が本当に安奈だとしたら、彼女が昔描いた歌手の像とは違う気もする。

でも、夢と理想を追い続けるのが大切なら、彼女は今も夢と理想を追い求め続けているのだろうか？

第9唱 夢と理想は人生の道しるべである（後書き）

そこそこ良い話を書こうとしたつもりですが、うまく表現できたか不安です。

第10唱 真実とは時に残酷（前書き）

このシリーズのマスコットキャラが登場！3匹の名前、募集したり、しなかったり。

第10章 真実とは時に残酷

コントトリオとアイドル話に花を咲かせた日の放課後。

僕はコーラス部の活動に勤しんでいた。

「よつしゃー、ミュージカルに向けて気合いれたるでー!!」

部長の鋼先輩が声を張り上げた。

歌の練習をした後、3カ月後のミュージカルに向けて色々と決めるらしい。

「みんな、どんなお話が良いか、提案シイやあ!!」

みんながざわめいて相談し合う。

「シンデレラや赤ずきんちゃんは？」

「インパクトが足りん!」1年女子の意見に鋼先輩が首を振った。

「シャーロック・ホームズ!」「どうやってミュージカルにするや。」

ホームズが歌って、踊って、名推理を繰り広げる。そんなミステリー舞台なんて出来るわけじゃないじゃないか!

「キューティーハニー」「セーラムーン」「プリキュアはどうだ!」

「却下!!」鋼先輩が大声を出す。

ちなみにその三つを言ったのは、女子ではなく、2年男子のオタクっぽい先輩である。ご丁寧に古い順番に並べられた。

「何かええアイデアはいねえ〜があ〜。」

鋼先輩がなまはげっぽくなった。

「何かアイデアがあればねんでもええ。別にオリジナルの話でもええやん。」

いきなりオリジナルの話の方が難しいと思うけど、と僕は思う。

オリジナルの話があ、偉大なる賢者様、ことツールを物語にしたら凄そうだ。小説にしたら売れたりして。ただ、まだ物語が完結していないのが痛いけど。ていうか、きちんと完結するのかなあ?ハッピーエンドなら良いけど。レポートしたり、勇気や穴掘り、色

々な魔法を覚えたけど、地味なファンタジー小説になりそうだなっていうか、一番最初の魔法が便秘回復魔なんて終わっていると思う。

そんな事を考えていたら僕は昨日拾った3匹の黒猫達の事が思い浮んだ。

「黒猫・・・」お腹すかしているかなあ、と僕は思った。

そんな僕の呟きを鋼先輩は耳ざとく・・・いや、鋭く耳で捉えた。「黒猫？・・・よし、黒猫を主役にしたいわ、劇団四季っぽいし。1年、お前はストーリーとか考えられるか？」

鋼先輩がビシツと僕を指差した。

僕はキョトンとしてから周りを見渡した。

みんな僕の事を見ている。

僕が右に歩くと先輩の指と視線が右へ向き。

僕が左に歩くとみんなの視線が左へ向く。

僕はようやく絶対絶命のピンチに気が付いた。

「ば、僕？ちよつと、無理ですよ。」

僕はあわてて首を振る。今の呟きは別にアイデアでは無いです。

「大丈夫や、試してみるだけや。来週までにあらすじを書いてきてみい。私も話を考えてくるから、お前さんの良ければ採用、駄目だったら私のを使うつもりや。気楽にしいとき。」

鋼先輩は胸をドンと叩く。頼りになる姉さんって感じた。・・・僕は迷惑 فقط。

「あのお、僕は・・・」（鋼先輩）ミュージカルは3カ月先だから今日はここまで。みんな、頑張ろうやあ！！」僕の意見は素晴らしい程きれいに流された。

僕が茫然としていると、帰りの際に、渡辺さんが話しかけてきた。「すごいね、田中君。ミュージカルのストーリー製作に関わるなんて。」

「いや、僕は・・・」「じゃあ、頑張つてね。楽しみにしているよ。」

「・・・いや、楽しみになんて・・・」渡辺さんも行ってしまった。

僕は去る渡辺さんを眺めながらポツリと呟きをこぼした。

「どうしてこうなるんだろっ・・・？」

『お前がヘタレだからだろう。』

賢者様は僕に真理をお授けになられた。真実とは時に残酷な物だ。

「ただいま。」

「・・・にやあ。」

にゃん子の声がハーモニーを奏で、癒しの三重奏となった。

子猫達が玄関で出迎えてくれた。めちやくちゃラブリー？

僕は猫達の姿に癒され、まるで天国にいるようだった。

「さてと、ミルクをあげなくちゃ。お腹すいちゃいましたでちゅよねえ。」

僕は猫バカ病を発症したようだ。こんな病ならば大歓迎だけど。

僕がリビングの扉を開いた。

僕は啞然とした！

新聞がビリビリに破かれて散らかっている。

物が床に散乱している。

花瓶は倒れて、床はビチャビチャ。Etc...

とにかくカオスな状態だった。

僕は腹が立って猫達を睨みつけた。

猫達は無邪気で穢れ無き黒い真珠のような目で僕を見る。

・・・なんか、ここで怒ったら僕が悪いみたいじゃないか・・・

「泣きっ面に蜂ってことかい？」僕はため息をつく。・・・

――79分4秒経過後――

僕は泣く泣く片づけをし、ようやく終わった。

「……にゃーん」……

子猫達は僕の苦労など知らん顔をし、餌をねだって鳴く。

「まったく、ギャグ漫画のツッコミ役はこんなやるせない気持ちなのかなあ？はあ、……。僕は物語の主人公になれない体質なのかも。」

僕は餌を食べる猫達を見つめながら呟く。

「悔しかつたら、自分でその場の主導権を一瞬間だけでもいいから握りやがれ！」

僕は、僕の主導権を御奪いになられた偉大なる賢者様に、海より深きありがたいお言葉を頂きました。

「はあ、どうしたらいいかな？お父さんや管理人さんに見つかったら大目玉くらうかな？」

二人が不気味な光を目から放つ光景が僕の網膜に焼きつく。

「隠し通したらどうだ？」

「気軽に言わないでよ。そんな事が出来たら苦労しないよ。」

僕はトールの無責任な言葉に口をとがらせる。

「はん、俺の言葉を疑うのか？とおるのクセに！この俺様、偉大なる賢者様の辞書に『不可能』という文字はねえんだよ！」

「ああ！今『不可能』って言ったよね。一応、君の頭の中には『不可能』という言葉はあるんだ。」

「屁理屈こくな！このヘツポコ野郎！ボケなす！おタンコなす！焦げなす！」

トールの怒鳴り声が僕の脳内を何度も反響して響いた。僕は思わず耳を塞ぐものの、僕の脳内に直接響くので意味は無い。……。どうでもいい事なんだけど、焦げなすとはなんだろうか？……。本当にどうでもいいけど……。

僕の頭の中で喚き続けた賢者様もようやく落ち着きになられたこ

様子でした。

『話を元に戻すが、その猫どもをお前の使い魔にすればどうだ。使い魔として魔力と知恵を授けて、お前の言う事を聞かせるんだ。人に見つかりそうになったら隠れるように言いつけると良い。』

「そうか！セー・ムーンの黒猫みたいな物か！それは良いかもしれないね。」

僕は手をポンと叩く。

トールは僕の言った事が分からなかったようだ。うーん、……。中学生なら、中学生らしく魔女の宅配●の黒猫に例えた方がよかったかな。異世界からきたトールにはどちらも分からないとは思っけれど、読者のためにもそうするべきだったみたいだ。

「さてと、そうと決まればどんな歌が良いのかな？」

僕は3匹を使い魔にするための歌を考えた。

人を助ける猫かあ、まるで長靴をはいた猫みたいだ。

猫が話をし、人を助ける物語はいくつか知っているけれど、間違ってもチェシャ猫みたいなのは嫌だな。3匹がにたにた笑って僕を馬鹿にするなんて耐えられない、そんなのトール一人で十分だ。

『何か、失礼な事を考えなかったか？お前の頭の中を積極的に覗こうとはしないが、お前の残念な空っぽおつむを、気を付けなければ、俺には見えてしまうんだぞ。』

「いえ、滅相も無いです。」

トールの厳しい声に僕はとぼけた。

トールとそんなやり取りをしながら僕は必死に考えた。

僕は自分の頭の中にある物に形を与えるため、そっと目を閉じ、自分の心を見つめ直した。

難しく考える必要はない。ただ、自分の中に有るものを掘り起こして行くだけ。

彫師はこんな事を言っていたような、言っていないような。「仏様

を作るのではない、ただ木の中にいらっしやる仏様を掘り出すだけだ」だと。

その話を聞いた時は良く解らなかったけれど、ツールと出会い、魔法を使うようになった今なら分かる。

魔法の歌は、自分の心を歌詞にするだけ

魔法の歌は、自分の気持ちを曲にするだけ

魔法だけではない

何かを作る事も一緒

何かを成そうとする事も自分の心に従って行動に移すだけ
誰かに思いを伝えるのも同じ事

僕は心を鎮めて、己の心の真実を探る。

僕の心の中、その深奥しんおうには広大なる宇宙が広がっていた。

そこには輝く星が散りばめられているが、僕以外に一匹の生き物もない。

美しく、同時に凍えるような広大なる宝石箱。

とても雄大で、とても輝かしく、そして寂しい所。

僕は一人なのだろうか

・・・いや、そんな事は無い。

ただ目には見にくいだけで、心を鎮めれば感じられる。

よく目を凝らせば、吸い込まれてしまいそうな闇の中に見えてくる。

ほら！

あの蒼い僕らの星を追いかけて、巨大で雄大で、かわいらしい黒猫がじゃれている。

地球にかわいく猫パンチをして地球がはじかれる。

火星に当たり、木星にあたり、ぶつかった星がまた別の星に当たり、ビリヤードのようにその連鎖は繋がっていく。

そうして、僕らの星が太陽に向かってはじき飛ばされた。

その小さな星に住む、小さな多くの人々の悲鳴が

ほら、耳をすませば遠くから聞こえてくる。『とおる！』

僕の名前を呼び、遠くから助けを求めている。『とおる!!』・・・

『とおる!!寝ているのか!!』

僕の頭の中で、トールの声が鳴り響く。

「あれ、地球は？猫は？」

僕は目をこすり、寝ぼけた感じの声を出す。

『よく分からん夢を見る奴だ。こんなのと一緒にいなければならな
いとは、これも俺に課せられた神の試練か？はあ、・・・運命は過
酷だな。』

トールが海よりも深いため息をつく。どうやら僕は歌詞を考えてい
るうちに眠ってしまい、夢に514文字も費やしてしまったようだ。
「いけない、いけない。ちゃんと考えないと。」

僕はまた歌を考え始めた。

「猫、猫、猫、猫、猫、猫、あぁ、もう！何にも思いつかない！！
何で魔法を使うのに国語の作文みたいに悩まなければならないんだ
あ!!！」

『くそつたれ、文句を言わずに考えろ!!』

トールが怒鳴る。

錯乱した僕は、僕が国語の作文程度の努力で魔法を使えるという
恩恵に気が付く事は無い。

「はぁ、イメージが湧かない。何か参考になるような小説でも読も
うかな。」

僕は本棚からペーパーバックのノベルを取りだす。

電撃・庫の本で、猫になった魔道士が主人公を助ける本である。

僕のお気に入りのシリーズだ。

僕はページをパラパラと捲る。

しばらくして、僕は手にしていた本を床に置き、もう一冊に手を伸
ばす。

またペラペラとめくり、また別の一冊に手を伸ばす・・・

20分経過した。

『とおる。お前、目的忘れていないだろうな?』

「も、もちろんだよ! トール!」

僕はあわてて答えた。その答えが嘘なのは一目瞭然だ。

トールはまたまた、ため息をついた。

まるで、世界の全てが凍りついてしまいそうなため息だった。

僕は猫たちをこの家で飼えるようにするため、この子達を使い魔にしようという思いを膨らませる。

どうして僕は、この子達と一緒にいたいと思ったのか?

この子達がかわいいからなのか?

僕は目を閉じ、再び、自分の心に耳を傾ける。

時計が時を刻む音が大きい気がする

部屋の中にいるのに、やさしい風の音を感じる

車の音が聞こえる、家で待たせている子供に一刻も早く会おうとする父親か、家族で外へお食事に出かける家族か・・・

僕はただ、ぬくもりを求めている。

ただ、誰かに一緒にいて欲しいだけ。

僕にはいつもトールが憑いている。

けれども、僕はトールの手を握ることもできない。

そう、本当は単純な事。

3匹を使い魔にするなんて、難しい事を考える必要はない。ただ、3匹と一緒にいたいと思うだけで良かったのだ。

僕はそつと口を開く。

3匹に出会った時の事を思い出しながら。

題名 心をつなぐ物

寂しさを感じていた僕

君達に会った時 それが優しく、薄れていった

勇気出して、歩きだした僕

君達に会った時、君達は悲しげだった

涙なんて見たくは無いから

例えそれが他人の物でも

人は無感情ではいられないから

きつと、人は独りではいられない

寂しさに押しつぶされてしまうのだろう

一緒にいられるのかな？

ただ、ぬくもりを感じたくて

君達にそばに居て欲しくて

君達の姿に僕は癒される

でも、それで十分なのかな？

できれば、もう少し・・・

目は口ほどに物を言う

そう言うけどホントかな？

僕はそれだけじゃまだ足りない

言葉を使うは 人だけ

それだから人は 言葉無しでは寂しいのかな？

お願い、君達の心を聞かせて

人は言葉なしじゃ、理解できない

見つめ合うだけではすれ違ってしまいかも

だからお願い
君達の心を聞かせてくれ

すると子猫達は眩しい光に包まれ、二本足で歩きだした……
うな事はなかった。

3匹はちよこんと座っている。

可愛らしい瞳で僕の事を見つめる。

「あれ？失敗だったかな？」

僕は頭を掻く。

「いったい、何が失敗だったのさ？とおる？」

幼い男の子の声が聞こえた。

「あれ、トール？僕に話しかけた？」

「俺じゃねえよ！」

今度は幼い女の子の声が聞こえた。

「何を寝ぼけていらっしやいますの？この、愚図な執事は？」

僕は混乱した。

「トール、君のいたずら？」

「だから、俺じゃねえって！お前の魔法が成功して、猫どもがテレパシーで話しているのさ！」

「え、子猫たち、まるで元々話せるかのように、何だか普通に話しているけど……」

「それは、貴方が愚図で私くし達の言っている事を理解できていなかっただけですわ。私たちはいつも高尚にお話ししておりましたわ。ちつとあなたのおつむが今まで残念だっただけですわ。」

彼女が高慢に答える。

「ねえ、とおる。一緒に遊ぼう。」

「僕、眠たいんだなあ。ふかふかの寝床を用意して欲しいんだなあ。」

「全くもう、気が効かないですわ、この愚図。早く、私の美しい毛」

並みのお手入れをなさい。』

子猫達がニャーニャー騒ぐ。

僕はボールと寝床を用意し、彼女をシャワーで洗った。もちろん、シャンプーにケチをつけられた。

僕はその日から色々子猫達にこき使われるようになった。

僕の家には3匹のかわいらしい仲間が増えた。

3匹が僕を出迎えた時、僕の帰りを歓迎しているのではなく、自分たち要望をかなえるためだったりして。

ひよっとしたら、世界中の猫たちは、僕たち人間を都合の良い奴としか思っていないかったり・・・。

果たして、魔法を使って良かったんだか、悪かったんだか・・・。
猫が何を考えているなんて知らなくてもいいのかもしれない。

第11章 3本の矢は堅い

「さてと、君達に名前をつけようかな。」

僕は3匹の猫に向かって話しかける。

決して、僕が猫に語りかける寂しい、孤独で電波な子供ではない。実際にテレパシーで僕と会話する使い魔猫なのだ。僕がパシられ、こき使われているけど……。

「名前かあ！？僕はね、アル・インがいいなあ。」

そう言ったのは、体の全身の毛が真っ黒な男の子。

始終飛び跳ね、僕にじゃれてくる可愛い子猫だ。一番、僕が想像する、良いイメージ通りの猫だった。

しかしながら、残念な事に、僕の部屋を荒らすほぼ全てはこの子の仕業である。花瓶が割れ、柱は引つ掻き傷、物が散乱。僕の想像する悪いイメージ通りにも完璧に実践する猫だった。

「それは駄目！そんな名前をつけたが最後！このお話が最終話になっちゃうよ！打ち切りだよ！！」

どうやら、彼らに魔法をかける前に読んでいた小説の影響かもしれない。

「そうですね。貴方にはクロとか、バカがお似合いですわ。」

澄ました顔で、途中、悪口を言い始めるのは、3匹の中で女の子の彼女。

彼女は顎からお腹にかけて白く、足はまるで靴下……じゃなくて、ブーツを履いているかの様に白い毛並みだ。他は黒い真珠のように艶やかならしい？・毛並みだ。そんな上品なお姫様のような女の子。

彼女は僕をこき使う筆頭者だ。

僕に四六時中ブラッシングを要求する。毎日、値段が高めの婦人用のシャンプーで洗う事を求め、餌のキャットフードも高級なのを僕に命じる。

彼女は本気で、自分を高貴なお嬢様で、僕を愚図な執事だと思っているらしい。

最初出会った時、僕が3匹の考えが分からなかったのは、僕が愚図であったから。今では僕が3匹の考えが分かるようになったのは、僕が少しだけマシになったからで、彼女達が魔法でテレパシーを使えるようになったからではなく、元々彼女達が話しているのをようやく愚図な執事に理解できるようになったからと考えているみたいだ。

とっても高飛車で、彼女と接するのは少し疲れる。はぁ・・・。

「・・・まあ、名前を考えてみたんだ。君はいたずらっ子だから、「妖精」や「いたずらな」という意味を持つ「ELF」から「エルフィー」という名前はどうかなあ。」

「ええー、僕はアルカ・・・」

「それでいいですわ、面倒ですもの。」

一匹目は決まったようだ。

僕は彼女に向き合う。

「えっと、お嬢様のお名前は何にしましょうか？」

僕はかしこまって彼女に話しかける。そうしろと彼女がうるさいのだ。

「私を「マリーアントワネット・楊貴妃^{ようきけい}・クレオパトラ」と呼んでも良くてよ。」

彼女は歴史上の姫君の名前をただ繋げただけの名前を語った。

そんな長い名前を、毎度毎度呼びたくなんでない。僕はあわてた。「そんな長い名前は覚えられないよ。」

「仕方のない愚図執事ですわね。「マリー嬢」で許してあげますわ。」

彼女は妥協してくれた？ようだ。

最後に今も眠っている彼の名前を決める番だ。

彼は頭と背中・尻尾が黒く、他は白い毛で覆われていて、まるでナイトキャップでも被っているかのようだ。いつも、眠たげな眼を

している。

彼はご飯と、トイレ以外ではいつも寝ていて、手がからない子だ。僕が手でなでも、猫じゃらしを振っても、無反応。この子の寝顔は可愛いが、ちよつと寂しくなる。

しかし、御飯だけはしつかり、かつちり催促する。

「この子の名前はどのようなあ？」

「・・・いか。」

「そつか、これからは「いか」って呼ぶよ。」

「あら、お似合いですわ。いか様。」

「いやいや、ちよつと待て！」

なんで本人がとんでもない名前を言いだすんだ。イカは猫が食べ
てはいけない物の筆頭ではないか。

おまけに、「いか」に「様」付けしたら、丁寧なはずなのに酷い
呼び方になってしまふ。マリー嬢、あんた分かつていて言っている
のか？

「いか、かに・・・お腹痛い・・・けど食べたい・・・zzz・・・」

『

どうやら寝言のようでした。

とんでもない寝言でした。

苦しんでまで、イカと蟹を食べたいのか？夢にまで見る食い意地
には両手を上げるしかない。

「イカじゃ可哀想だよ。この子は「怠惰な」という意味の「l a z
y」から、「ラジー」と呼ぶ事にしよう。」

これで3匹の名前は、いたずらっ子の「エルフィー」、寝坊介の
「ラジー」、高飛車なお嬢様の「マリー嬢」と決まった。

「まったく、喧しい^{やかま}いたら、ありやしない。」

「トールが忌々（いまいま）しげにつぶやく

「ねえ、これ何だろう？」

エルファイが僕のPSPに爪を立てる。

「だめえええ！僕のも・ハンのデータがああ！！」

僕は慌てて、P・Pを確保する。僕がゲーム内で一生懸命に育てた猫達が、リアルに飼い始めた猫達に消される所でした。ゲームのは、グスン、とっても可愛らしいのに……。

『……まったく、……五月蠅いなあ……zzz。』

『全く、馬鹿な執事と弟達には困ります。しかし、これも姉の宿命なのでしょうか。』

五月蠅いと言いつつもラジーは平気で眠り。

忌々しいと言いながらも、マリー嬢は優しく弟達？を見守る。

何だかんだ言って、仲の良い3匹。

僕はそんな3匹を見ていると昔を思い出す。

僕と安奈と黄麻、3人の思い出を……。

（小学2年生の回想）

その日は学校で七夕の行事だった。

学校で用意した、校舎の3階にまで届く笹に、みんなで飾り付けをした。

みんな「ケーキやさんになりたい」とか、「ウルトラマンになりたい」とか微笑ましい物。「そうりだいじんになってにっぽんをかえる」とか、「きかいだいじんになりたい」とか、あまり小学生とは思えない願い事もあった。

「ねえ、アンナちゃんはどんな願い事を書いたの？」

黄麻が安奈に聞く。

「へへッ、私は歌手になりたいって書いたよ。黄麻は？」

彼女は恥ずかしそうにも、嬉しそうに話す。

「僕は「そうりだいじんになってにっぽんをかえる」って書いたん

だ。」

小学生らしくない願い事を書いたのは、黄麻だったらしかった。
「ねえ、とおるはどんな事を書いたの？」

安奈が僕の短冊を覗いてくる。

僕は短冊を伏せる。

「なによ、見せてくれたって良いじゃない。笑わないからさあ。」

安奈が口を尖らせて言う。

「別に僕だって笑わないよ。」

黄麻も言ってくる。

「ええ、でもう・・・」

「私の事が信じられないって事？ああ、もういいですよ。そんなに私の事が信用ならないってこと？」

「いや、そういうわけじゃ・・・」

僕は口ごもる。

「ああ！分かった。人には言えないような願い事ね。エッチな事かしら？」

「ち、違うよ!？」

安奈がじとつと、僕を見つめ、僕は慌てて否定する。

「ホントウウー!？人に見せられる願いなの？」

「本当だって!」

「じゃあ、私が見ても良いよね？」

「ホント・・・って、ええ!？」

「なんだ、見せられない願い事なのね・・・」

「そんな事ないって!」

「よし、じゃあ見せなさい。」

「あ、えつとその」

僕がしどろもどろになっている内に、安奈は僕の手から短冊を奪い取った。上手く誘導されたいらしい。安奈はいつも、僕より一枚上手だ。

「なになに。“みんなとずっと一緒にいたい”？」

安奈は読んでいる内に、疑問形になってしまった。

黄麻は気まずい顔をした。

「何でこんな願い事を書いたの？こんな願いを書かなくなつて、私達は一緒にいるわよ。」

僕は俯く。

「僕は・・・その・・・」

僕はまた口ごもる。上手く言葉が出てこない。

「いつ・・・大事な人に会えなくなるか・・・分からないから・・・」

「

僕が母親を亡くした事を知っている二人は、顔を陰らせた。

少しの間、気まずい沈黙が流れた。

しばらくして、安奈は顔を上げ、僕も見つめた。

「大丈夫よ、私達は突然死んだりしないわ。だって、死にたくなんてないもの。大丈夫よ。」

彼女は自信があるかのように言った。

僕は戸惑う。

「で、でも・・・大人になっていけば、会えなくなる事だってあるかも・・・」

僕は幸せなんて永遠で無い事を知っている。

それでも、彼女は言う。

「確かに、同じ高校・大学に行くかどうか分からない。大人になれば、仕事でほとんど会えなくなるかもしれない。」

彼女は続ける。

「でも、なかなか会えなくても、私達3人がお互いに会いたいと思えば、きっと会えるわよ。きっと、一旦別れても、またどこかで再会出来るわよ。だから、心配しなくて大丈夫。」

彼女は自信ありげに言う。

「大丈夫だよ、とおる。僕だってそう思うよ。」

黄麻も言う。

「そうかな・・・」

「そうよ！」

「・・・うん、きつとそうだね。」

僕もようやくほほ笑む。

「例え、私達の道が分かれたとしても、きつとまた3人の道は交差する。私達の道が再び交差する事を願いながら、私達は道に行く。きつと・・・」

安奈が詩的な事を言う。

「アンナちゃん、それ、良い歌詞になりそうだね。」

黄麻が褒める。

「そうだね。いい歌手になれるんじゃないかな？」

僕も褒めておく。これで何日か彼女は機嫌が良いだろう。

「へへへ、ありがとう。」

安奈も少し照れ臭そうだ。

照れながら、彼女は僕ら二人を見ていった。

「ねえ、短冊に願い事を書き足さない。」

笹に生徒達が群がり、それぞれの短冊を飾っている。僕らはそんな中に混ざり、3人で同じ枝に短冊を結び付ける。

「よし、みんな！笹から離れろ！笹を起こすぞ！」

先生がみんなに声をかける。

生徒達が笹から少し離れた所から、笹が大地に立つ所を見物する。先生達が普段使わない、たるんだり、やせ細ったりしている体を酷使した。

よいしょ、うんしょ、と声を張り、体に鞭をうった。

「・・・わああああ！！」「・・・」

生徒達が歓声を上げる。

僕達も口を開けて見上げる。

天高く、と言っても校舎3階分の高さではあるが、子供の僕らにとってはとてつもなく高い所に飾られた気がした。

笹の上の方、太陽が逆光になって良く見えないが・・・。
風に揺れる僕らの短冊3枚には、「ずっと一緒にいたい」との願
い事が書き足されていた。

僕は3匹を見つめながら、昔の事を思い出した。

「確か、この時の安奈の言葉、あの時の歌に使われたっけ？」
僕はほほ笑む。

彼女曰く、歌には思いを、願いを、思い出を、心を込めるものだ。
あの頃が懐かしくなる。

今、僕らは会えないでいる。

今、僕らの道は分かれたままでいるのか。

またいつか、僕らの道は交差するのだろうか。

でも、会いたいと思えば、また会えるのだろうか？
分からないけど、そうだと信じたい。

第11唱 3本の矢は堅い（後書き）

安奈の歌はラストのキーアイテムになる予定です。（そうなるかどうかは分らない）

第12章 ヒーローは孤独で、過酷

今日は学校のお休み。

普通なら友達とカラオケに行ったり、家で一緒にゲームしたり、どこかへ遊びに行ったりして、休日を満喫するのだろう。

しかし、僕には友達はいても、休日に遊ぶほど仲の良い友達はいない。

今、僕は一人で机に向かい、うーん、うーんと、唸って、部活でやるミュージカルの大まかなシナリオを考えている。

ちなみに子猫達は……

『行け！ スーパーマン！』

『目からビームなんだな……』

『この紳士は頼りになりますわ。それと比べてうちの愚図執事は……』

……

一昨日、録画した映画「スーパーマン」に釘付けた。

昨日も見ただが、また見たいと駄々をこねるのだ。猫が見て、

おもしろいのかなあ？

ラジーとマリー嬢が見せると五月蠅い。

エルフィーはスーパーマンを見ていない間は、スーパーマンのまねをしたがる。

まるで小さな弟ができたように微笑ましいのだが、エルフィーがスーパーマンになりきると、部屋を散らかす量もスーパーになるのだ。

通常の3倍散らかしているかな？正直止めて欲しい。

仕方なく、僕は「スーパーマン」を見せて、3匹には大人しくしてもらおう。はあ……。

僕はため息をついて、真っ白な原稿用紙を睨む。どうしても、思いつかない。

僕が悩んでいると、偉大なる賢者様が僕にお声をかけて下さいま

した。

『おい、とおる。俺にもスーパーマンを見せろ！俺はお前と視覚を共有しているから、お前が目で見なければ、俺も見えないんだよ！』偉大なる賢者様はトコトン僕の邪魔をしたいご様子です。

「ねえ、トール……。僕は今一生懸命になって原稿に取り組んでいるんだけど……」

『うるせえ！ お前の耳障りな唸り声と、白紙の原稿用紙にはもう、うんざりなんだよ！』

僕はさらに深いため息をつき、テレビを見る。シナリオはまた後で、だ。

トールは感心したようにスーパーマンを見る。

『凄いな！ この男は！魔法を歌った様子も無いのに、空を飛び、怪力を発揮するとは……』

「トール。これは本物じゃないよ」

『うるさい、分かっている。でも、テレビとやらも相変わらずに凄いな。幻を簡単に見せる事ができるとは……。』

トールの世界は魔法が発達しているが、科学はさっぱりらしい。

トールは感心ばかりしている。

もう、こりゃ駄目だ。トールの望み通りに従うしかないだろう。

結局、僕はスーパーマンを最後まで見てしまった。シナリオは未だ白紙だ。

これはもう、僕にはシナリオ作りなんて無理だと悟った。

『いや、スーパーマンは良かったな。次回作をみたいぜ！とおる！今度DVDとやらを借りてこい！』

「もうしばらくは、見たくないからね！ でも、何でDVDとレンタルを覚えたんだ！いつの間に！ファンタジー世界の住人のくせに！」

もう、スーパーマンに僕の時間を振り回されるなんて、もう嫌だ！あつ、でも、スーパーマンは悪くないよ。みんなも一度くらいは見たらどう？

「はあ。スーパーマンの活躍を少しぐらい僕に分けて欲しいなあ。

僕は悪者をやつつつきたい訳じゃないけど、学校まで一つ飛びで登校して、体育や勉強も上手くいけばいいのに……」

僕はため息をつく。世の中そんな甘くない、というか、僕の人生はそんな上手いじゃない。四六時中、賢者様の小言を頂く御身分だ。ため息をつく僕を余所に、トールは何かを考えている様子だった。『そうだ！』

賢者様は何かが閃いたらしかった。

僕は何か嫌な予感がした。

『とおる！ スーパーマンに変身する魔法を作らないか？』

「………。」

僕はトールの言葉に凍りついた。

「へっ？ す、すーぱーまん？」

じよ、「冗談じゃない！スーパーマンのあの格好は、ハンサムでマッスルボディーだからこそ似合うんだ。ヒョロヒョロで、もやしっ子な僕があんな恰好をすればお笑い草だ！8代先まで、背中を指差され、笑われる事だろう。

『そうだ、スーパーマンに変身出来たら、カッコいいだろう？』

「スーパーマンなんて、絶対に嫌だ！」

『グチグチ言うな！ スーパーマンが嫌なら、もっとカッコいいヒーローに変身しろ！』

「勝手な事言わないでよ！ まだ、シナリオが出来上がっていないんだよ！」

『不良にからまれている人がいても、ヒーローになれば助けてやれるだろう！ 前はグチグチ悩んでいたくせに！』

「た、確かに悩んだけど……。それとはまた別だよ！」

トールと言い合っている内に、3匹が興味津津で寄って来た。

『とおる！ スーパーマンになるの！？スゲー！！』

『凄いなあ。僕もなつてみたいんだなあ。』

『愚図な執事も少しはマシになるかしら？』

僕のシナリオ作りの道のりは、一步も進まずに、どんどんと険しくなつてゆく一方だった……。

「さてと、どんなヒーローになろうかなあ？」

僕は悟りを開いた。

こいつらの要求を満足させないと、僕は邪魔される一方だ。一刻も早くヒーローに変身しなければ、ミュージカルのシナリオに専念できないだろう。

『僕は、やっぱり、猫っぽいヒーローがいいなあ。ニャ・ダー仮面みたいな。』

何故、こんな小さな黒猫が、そんな11年前のアニメを知っているんだ。小さい頃、よく見ていたらしいが、よく覚えていない。

『僕は、パ・マンがいいんだなあ。』

これまた古い。でも、こっちの方は知名度が高い。

『プリ・ユアみたいなのが良いですわ。かわいい衣装で戦うのです。』

『女の子の格好なんて冗談じゃない！』

さすがに僕は否定した。そんな格好するなんて地獄だ！

一人だけ否定されたのが、マリー嬢は不満そうだ。

『大丈夫ですわ。最近は男の娘が流行っているそうですもの』

「マリー嬢！ 君は絶対お嬢様な性格じゃないね！ それはオタクだ！ 腐女子だ！」

マリー嬢はツンとそっぽを向き、『差別ですわ』と、ぼそぼそ呟いている。テレパシーで、だけど……。

僕はみんなの意見を取り入れて、紙に変身した時のイメージ像を描いた。ちよつと下手だけど・・・。

「こんな感じの衣装はどうか？」

「とおるにしちゃ、上出来だな。」

「いいと思うよ。」

「かつこいいんだなあ。」

「愚図な執事もやればできるのね。」

紙には黒い黒耳のついたマスク、漆黒のマント、黒いブーツとグローブ、黒くスタイリッシュな服を身に纏ったヒーローが描かれている。なかなかの力作だ。この挿絵をそのうち描くとしようかなあ

「さてと、次の問題は・・・歌かあ・・・」

これまた難問だ。歌が魔法の力を左右する。これに願いを上手く込められるように作らないといけない。

どんなに君が遠くで泣いていたって

僕は君の嘆きの声を聞き逃さない

猫の耳はどんな声も捉えるから

僕に助けを求めて

どんなに君が遠くで悩んでいたって

僕は君の元へ駆けつけるよ

猫さうぞうって意外と足が早いから

颯爽さうそうと駆けつけるよ

・・・・・・・・・・・・・・・・

「うーん、上手くないなあ」

僕は失敗して唸る。

『誰かを助けたいと思う心が足りないんじゃないか？』

「確かにそうだけど・・・今、誰かを助けたいなんて思う？」

『うーん……』

今は平和だ。誰も困っている人もいないのに、誰かを助けたいなんて思わないだろう。

『・・・とにかくもう一度やれ！』

トールが苦し紛れに怒鳴る。これじゃあ、八つ当たりだ。

『とおる！ファイト！』 『がんばるんだなあ』 『しっかりとしなさい！』

3匹が僕にエールを送る。

「じゃあ、もう一度試してみるかあ」

僕がもう一度歌おうとすると、ドアがドンドンと叩かれた。

「はい」

僕は中断して、玄関のドアを開けた。

すると、隣の部屋のおばさんが立っていた。

「あの・・・何でしょうか？」

おばさんは怖い顔をしている。それとも、元々怖い顔をしているのだろうか？その可能性も否定できない。

「ちよつと！ 休日の昼間に何大声で歌っているのよ！！ いい加減にしてちょうだい！！」 せつかくのチャン・グンソク様の活躍が台無しじゃないの！！」

メッサ怒られました。

スパイ・ーマンをみれば分かる。ヒーローはいつだって孤独で、過酷なのだ。まだ、ヒーローになっていないけど・・・。

「ここなら大丈夫だろう」

僕は誰もいない川べりに来た。ここなら歌を歌っても、誰にも文句を言われないだろう。

トールと子猫達が見守る中、ヒーローに変身する魔法を歌い続けた。

一時間経過

もう、既に太陽が空高く登ってしまった。もう、お昼でお腹も空いてきた。

僕は歌い続けたが、一向に成果は上がらなかった。

時折、ジヨギングをするおじいさんが通り、クスクスと笑われた。結構恥ずかしい・・・。

『やはり、誰かを助けたいと思わなくちゃ駄目かあ』

トールも諦めモードに入りかけている。元々、突拍子もない提案だったのだ。

「はあ、もう、諦めようかなあ」

僕も、歌い続けてノドが乾いてきた。

ちなみに、黒猫達は、なかなか変身できない僕にしびれを切らし、土手で遊んでいる。

「今日はもう帰ろうかな」

僕はため息をもらす。今日の成果は、外で歌を歌うのに慣れてきたという事だけだ。

『誰か、助ける必要がある程の事故に巻き込まれた人がいればいいんだが・・・。例えば、溺れている人とか、橋から自殺しようとしている人とか』

「それ、不謹慎すぎるよ、トール」

僕はトールの呟きに、力なくツツコム。

僕が帰ろうとして、顔を帰り道に向けると、少し離れた所にある橋の上に小学生ぐらいの男の子が立っていた。

こちらを向いているので、一瞬、僕の歌を聞かれていたのかと思った。しかし、そうではなく、なにやら俯いて川を眺めている。

「あんな所で、一人でいるなんて、どうしたんだろう？」

他人から見たら、自分はブツブツ独り言をしゃべり、変な歌を歌

っているように見えるだろうが、そんな事は柵に上げて小学生をそんな風に思う。

小学生を見ている内に、彼は橋の柵を越えた。

「あれ？ 何しているの？ あの子？」

僕は頭の中にハテナマークを浮かべながら、小学生を見ている。すると急に、小学生が頭からまっさかさまに、川へ飛び込んだ。

「あれって・・・、もしかして自殺！？」

僕は慌てた。

『タイミングが良いな！』『タイミング悪！』

感心したようなトールの呟きと、慌てた僕の叫びが重なった。

「どうしよう！？ 僕、泳げないよ！？」

僕は混乱している。

『馬鹿！ここでヒーローに変身する魔法を試さないでどうする！』

トール、君って結構酷い奴。まあ、今さらだけど・・・。

『何何？ ついに変身するの！？』

黒猫達も寄って来た。みんなは変身に気を取られていて、僕以外の誰も少年の心配しない。みんな畜生だ！あつ、でも、猫たちは動物だったか。

僕は慌てている中、心を鎮めて、何十回と歌い続けた歌を歌った。

題名 ネコトウマスク 黒猫仮面

どんなに君が遠くで泣いていたって

僕は君の泣き声を聞き逃さない

猫の耳はどんな声も捉えるから

僕に助けを求めて

どんなに君が遠くで嘆いていたって

僕は君の元へ駆けつけるよ

猫って意外と足が早いから

颯爽と駆けつけるよ

僕の心の中　その熱く燃える
正義の心が僕を導く
どんな困難が君に襲いかかっても
僕がそばについているよ

どんな時だって
君は独りじゃない
君のそばに僕がいて
家族、友達、恋人
みんな君を思っているから

君は、君だけのものじゃない
だから、僕は君に手を差し伸べるよ
君の心が挫けてしまわないように

黒い闇が僕を包み込み、それが消えた時には、僕の体は黒い服に身を包まれていた。黒い猫耳のついた仮面を被り、黒いマントで身を包んでいる。黒い革のグローブとブーツをはめ、スタイリッシュな服を着て、猫足マークの飾りがついたベルトをしている。

僕は川に沈んでいく少年の方に走った。

その早さに、耳元で風が唸るのが聞こえ、あっと言う間に少年の所に近づけた。

「えっと、マントもあるけど・・・、飛べるかなあ？」

僕は空に向かって、「飛べ！」と念じながら、ジャンプした。
無理かなあ、と思ったが、少し足が浮いている。

「うお、やった・・・、て、あれ？」

気を抜いたせいで落ちてしまった。今後、練習が必要になりそう

だ。

僕はそれでも何とか水面ぎりぎりを飛び、小学生を土手に引上げ張上げた。

「ふう、大丈夫だったみたいだ……」

小学生は落ちたばかりで、水を飲んでいない様子で、すぐに目を開いた。

彼は茫然としている様子だった。無口で、体が震えている。

僕は小学生に優しく声をかける。

「大丈夫かい？こんな危ない真似を、もう二度としちゃ駄目だよ」

僕が彼の頭をなでてやると、彼は正気に戻ったようだ。

「な、なんで助けたんだよ！！」

「へえっ？な、なんでって？」

小学生の怒鳴り声に、僕は声が上ずる。

「余計なお世話なんだよ！勝手な真似するな！」

彼は顔を真っ赤にして叫んだ。

「えっと、でも……」

「馬鹿な格好をして、ヒーロー気取りか！？　ダサイんだよ！」

「だ、ダサイ……」

ダサイんだよ（×3）

僕の頭の中で、小学生の痛恨の一撃が響き続ける。

僕がショックで茫然としてみると、少年が何処かへ走り去った。しばらくの沈黙の後、僕はトールに尋ねた。

「これって、……ダサイかな？」

『さあな？俺は気に入っているが……』

トールもちょっとショックだったみたいだ。

僕はため息をつく。

「誰か、僕のガラスの心を守ってくれるヒーローはいないかなあ……」

ヒーローはいつだって、孤独で、過酷なのだ。

第12唱 ヒーローは孤独で、過酷（後書き）

主人公が歌って変身する斬新なヒーローものになるかもしれませんが、チート、バトル、残酷な描写が入るかどうかわかりませんが、読者の方は読み続けていただけたらと思います。

第13章 人生相談は自分が人生を積んでから！

「いたい、あの子、何があったのだろう……」

僕は机に向かって白紙の原稿に向かったが、ペンは一向に進まない。白紙の原稿用紙を前にしても、川辺であつた男の子の事が頭から離れない。

『全く、原稿が進まないのをあの子のせいにするつもりか？ あの子も良い迷惑だろうよ』

トールの嫌味に僕は口を尖らせる。

「別に、そういう訳じゃないよ」

僕はそう答えながらも、あの男の子の目が思い浮ぶ。孤独で、悲しそうな目をしていた。

「あの目はまるで……」

僕はポツリと呟く。

結局その土曜日は成果が上がらなかった。

日曜日の朝、僕はまた白紙の原稿用紙の前でうんうんと唸っていた。

『はあ、白紙の原稿とお前の唸り声が脳裏から離れないぜえ。何か面白い事はないかねえ』

トールも退屈しているようだ。基本的に彼は僕に語りかける事以外にやれる事が無いので、そりゃまあ退屈から逃れる事は難しいだろう。まだ、引き籠りの方が人生を満喫していそうだ。唯一の救いは、引き籠りと違って宿主に生活費を要求しない事である。

「だめだなあ。図書館にでも行ってみようかなあ？」

『そうしろ。このままじゃ退屈で、退屈で、俺の精神が参っちゃう』
僕の呟きにトールが賛成する。

『僕も！ 僕も！ 図書館に行きたい！！』

『図書館？ 寝心地良いかなあ？』

『高貴な私には読書が似合いますよね』

子猫達も興味新進だ。

「えっと、猫は図書館には入れないから、図書館まで散歩するんなら良いけど……」

『『『ええ〜！』『』『』』

子猫達は不満そうだった。

僕は子猫達を連れて、道を歩く。僕は残念な事に自転車をまだ持っていない。

僕の前を子猫達がじゃれながら歩く。僕の住むマンションはペット厳禁な為、マンションの出入りには十分に気を付けてもらう。彼らがマンションの住人に見つかっても自己責任、余所の猫の振りをしてもらう。マンション暮らしのシティキャットは、毎日がハードライフなのだ。

僕達は図書館に行く前に、ちょっと昨日の川に寄り道した。全くの反対方向だけれども、昨日の男の子がいるかどうか気になったのだ。

今日も空は青々としていて、川端にある雑草は穏やかな風にゆらゆら揺れ、濁った川が日の光でちらちらと輝く。一日にどれだけ走っているのか謎なおじいさんが「エッホ」と掛け声をかけながらランニングをしている。雑草の上で小学生4人が集まって、立ったまま、なにやら小さく動いている。両手にPSPを持ち、「狩れ！」とか「ボウガン行け！」とか話しているところを見ると、どうやらモンハンを青空の下で楽しんでいるらしい。

僕が川端を眺めながら歩いていると、昨日の男の子らしき子が河原にポツンと座っていた。ちょっと離れていて昨日の男の子が自信なく、話しかけて人違いだったら恥ずかしい。

エルフィーがその男の子に寄り、風に流れてくる匂いを嗅ぐ。

『昨日の子だよ、ねえ、とおる、早く！』

エルフィーの言葉で僕は安心して彼に近寄るも、どうやって声をかけるか思いつかず、立ち止ってしまふ。

えつと、どうしよう？「昨日お会いしましたよね？」でも、それじ

や、僕が黒猫仮面ネロガトゥ・マスクであるとばれちゃうし……「本日は晴天ですね

？」もおかしい、変な人だと思われるし。「僕、げんき出しないよ？」って、小学生相手に何を聞いているのか、僕は……

僕の頭が混乱していると、三匹がしびれをきらしたようだ。

『とおる！ 早く！』『ンアア？』『早くお願い！』

それでも動かない僕を無視して、三匹が斬る！

『チャンチャララ』チャンチャチャチャチャ、チャンチャララ
ン』

エルフィーが自分で時代劇っぽい効果音を発しながら、彼に走り寄った。彼の効果音は僕らにしか聞こえないけど……

『それー！ 野郎ども！ 突撃ー！！』『んだなあー！』『あら、レディもいるわよ。』

三匹がろくでもない事に力を合わせた。

『『ジエツト・ブラック・アタック！』『』』

緑の大地を駆けるエルフィーが彼の背中に飛びつき、後続のマリー嬢が首元に前足の足形をつける勢いで飛びついた。最後にラジーが空高く飛び上がり、宙で一回転して、華麗に彼の頭の上に飛び乗った。

「うわっ！！」

彼は川端の少し斜面になっている所に体育座りをしていたので、三匹に飛びつかれ、でんぐり返しをする要領で前に転げ落ちてしまった。一回転、二回転、三回転と転がり、きれいにピタッと下で体育座りの格好をして止まった。

「なんて事をしてくれるんだあ！」

僕が愚痴をこぼしながらも、彼に駆け寄った。彼は突然の事に茫

然としているようで、目をまん丸にしている。

彼の数歩手前で僕は立ち止って、どう声をかけようか言葉に詰まってしまった。言葉は言霊。特に最初の一言は良好な人間関係を築く上でとても重要である。最初のアプローチで人の第一印象は決まり、この場の第一印象が悪ければ彼に話を聞く事はできないだろう。そうして、言葉を慌てて探してこう言った。

「十点満て、ん？」

僕が思いつく限りで、最悪な印象を与えてしまっただろう。

暫くの間、彼は茫然としていたが、僕の声に気がついて僕をキツと睨んできた。

「……何か用」

絶対零度の視線が僕の顔を貫く。人の視線が痛いと思った事は、これが初めてかもしれない。

「あつと、えつと、その、ごめんね。僕が飼っている猫が迷惑かけたね？」

僕はちよつとひきつった苦笑いを浮かべながら謝る。彼はあきれたかのように、少し睨む視線が和らぐ。そばにいたラジーに気が着き、彼の頭を優しくなでる。

「この子達、お兄さんの猫？」

「えつと、そうだよ」

彼は「へえ」と頷く。

「うちは、マンションだから、ペットは飼えないんだ」

「うっ！」

僕は思わず声を詰まらせる。僕もマンション暮らしたが、ペットを無断で飼っている。おまけに、まだ予防接種もままならない。僕は飼い主として失格かもしれない。

僕が悩んでいるのを余所に、彼は「もしかしてこの子が昨日……なわけないな」とか呟いている。

悩んでいる僕を、彼はエルフィーを膝に乗せたまま僕を見上げた。
「……ねえ、お兄さん。」

「・・・(ぶつぶつ)、そういえば・・・いや、えっと、ごめん。何？」

僕は悩みを振り払い、彼の呼びかけに応えた。

「ねえ、僕、お兄さんと昨日会った？ お兄さんは変な格好をしていなかった？」

「い、いや、会ってないよ。もしかしたら、どこかですれ違ったかもしれないけど・・・。変な格好の人も、僕は知らないよ。」

「そう……」

僕はあわててそう応えてアハハと笑う。

「ねえ、この子達を抱いてみる？」

僕が話をさりげなく、強引にそらす。昨日の黒猫仮面と同一人物だなんて知られたくない。

「この子達、変わっているよね。猫が初対面の人間に飛びついて来るわけないのに。」

「こいつらは好奇心旺盛なんだよ。」

そう言いながら僕は苦笑する。

「ほら、こうやって抱くんだよ。」

僕がぎこちなくラジーを抱き上げる。

『苦しいんだな！ 窮屈なんだな！ 早く下ろすんだな！！』

ラジーは尻尾をバタバタ振り、足でもがく。

「クスッ。お兄さん。猫飼っているくせに、猫を抱くのが下手くそなんだね。」

彼は少しほほ笑みつつも、エルフィーを抱き上げ、僕に抱き方を見せた。

「ほら、お腹を胸にくっ付けて、お尻の下からこういう風に。」

『ヤッホー！ ラジー。気持ちいいね』

『全く。なに、年下の男の子に教わっているんだよ。』

ツールに茶々を入れられながらも、僕は彼の抱き方を手本にしながら、抱き方を直した。

『はあ、苦しかったんだな』

ラジーが落ち着いたようだ。どうやらこの抱き方が良いらしい。

「ありがとう」

僕は照れながらお礼を言った。

僕はラジーを抱きながら、彼のすぐ隣に座った。

彼もエルフィーを抱きながら座った。

「私は抱かないのですか？ エルフィーとラジーばかり不公平です。私には地べたがお似合いって事ですか？ 私の美しい肉球が痛んでしまいますわ！」

マリー嬢がプンスカ怒る。

僕は苦笑しつつ、あぐらをかいて、ラジーの隣に彼女を乗せ、濁った川を眺める。

本当は彼に話を聞きたかったが、どうやって話を切り出したらいのか分からず、ただ都心を流れる汚い川を眺める。

『早く話を聞けよ、このヘッピー腰！ なぜ、あの格好がダサいのかを！』

「……………」

僕は隣にいる彼に、僕が独り言を言う変な人間と思われないため、トールの罵倒に対して沈黙を守る。

しかし、トール。聞く事があさつての方向を向いているよ。余談ではあるが、よく熱血ドラマでは「明日に向かって努力する」とか「来年に向けて鍛える」とかあるけれど、「明後日に向かって努力する」とかは聞かない。「明後日に向かって努力する」だと、とんでもない方向に向かっていているような気がする。明日・来年と明後日の格差は何だろうか？ 本当の本当に余談だけど…………。

僕がそんな今はどうでもいい事を考えていると、男の子はエルフィーを膝の上から下ろした。

「さてと、お兄さん。僕はもう帰るね。」

「あ、ああ。……………またね。」

男の子は立ちあがり、トコトコ歩いて行った。ただ一人ポツンと歩く姿は、青空輝く太陽に照らされていても、どこことなく哀愁を漂

わせている。男の子はそのまま歩いて行って、どこかに消えてしま
いそうな雰囲気を感じる。

そんな男の子の後姿を見ていて、僕はハッと気がつく。

「あつ！ まだ名前も聞いていなかった……」

『相も変わらず愚図な執事です事』

男の子の悩みどころか、名前すらも聞けなかった僕にとって、マ
リー嬢の嫌身には耳が痛かった。

僕は子猫たちと別れて、今は図書館で本を読んでいる。

子猫達はそのまま商店街をお散歩しに行った。お肉屋さんやお魚
屋さんの近くで可愛らしくうろついていると、時々ごちそうを貰え
るらしい。野良の経験の賜物だ。たまもの

僕はミュージカルのシナリオ作りの為、参考文献を読んでいる。
「長靴をはいた猫」は基本だ。しかし、僕がその本を読んでいるの
は、その基本中の基本を読んだ事が無かったからだ。なにかのアニ
メや人形劇で見ちゃうと、いちいち活字を読もうという気になれな
いんだ。現代人は忙しく、心のゆとりの時間を持つ事ができないん
だ。僕もゲームや漫画に忙しく、活字を読む時間が無い。もっと自
分の時間が持てたらいいのに……。

僕は読み終わり、本を閉じた。お昼は過ぎてしまったが、運動不
足なもやしっ子スキルで昼ごはんを抜かす。外食は僕の虎の子のお
小遣いにハルマゲドンを引き起こす。贅沢は敵なのだ。

「長靴をはいた猫」を読み終わった僕は本棚に返却し、新たな
世界に手を伸ばす。その一冊は太古から英知を求める人間に大いなる
宝を授けるため、目覚めの時をずっと待ち続けていた。その一冊
は太古の昔、極東の地にて、夏目漱石という偉人が残した一冊であ
る。その本は何人のものの人間がその写本を刷り、現代にまで伝え
られてきた。

して、その本の題名は……………

「『吾輩は猫である』、みつけ！」

僕は何度この英知の書に挫折を繰り返してきたのか……

小学１年生の時、父が持っていたが投げて遊んでいた。

小学５年生の時、一ページ目だけを読んで放り投げてしまった。

しかし、今度こそは読み切ってみせる！

『三度目の正直』という、ことわざは、今日この瞬間の僕の為に在る……！

僕は読書席に戻り、英知の書と向き合った。

ページをめくると、古い用紙の匂いがする。お世辞でもいい匂いとは言えない、というか少し臭い。指で触ると、ガサガサするだけだ。

僕は古い本の感触を我慢して、活字を目で追いだした。

快調な読み出しだった。全ての物事は始まりに大きく左右される。もし、人生が始まりで全てが決まってしまうのなら、それこそが運命と呼ぶべき物かもしれない。

そう、快調な読み出しを踏む事ができた僕は、運命の女神が微笑みかけられているのだ。

そして今、僕は２０ページ目を開いたまま、机の上に突っ伏している。英知の書に仕掛けられた睡魔の力は僕を拒んでいるかのようだった。

『二度ある事は三度ある』ということわざは、今日この瞬間の僕の為に在る！

僕の上と下の瞼が押しつ、押されつつの激戦を繰り広げている所に、第三者が乱入した。

「田中君も図書館に来てたんだ」

「ふえ、あれ？ 渡辺さん？」

そう、僕が睡魔の罠に墜ちかかっている所を渡辺さんが引っ張り上げた。

「へえ、『吾輩は猫である』を読んでいるんだ。私、どうしても古

めかしい文体が苦手なんだよね」

「そうなんだあ。僕もどうやら苦手らしい……」

僕は寝ぼけた頭で返答する様子に、彼女は少し笑った。

「そうだね、そうとう眠そうな顔をしているもん」

僕は「んー」と唸るような返事をした。

「ねえ、これってミュージカルのシナリオ作りの参考にするつもりだったの？」

彼女は僕の読んでいたページを覗き込みながら、僕に聞いた。

「そうだけど……、どうやら難しいらしいね」

僕はため息をつき、恨めしげに本を力なく睨んだ。

渡辺さんは僕の様子を気の毒そうな顔をした。

「そっかあ。まあ、仕方無いんじゃない？ 先輩もできるだけで良いつて言ってたし。」

「そうかもしれないけど……。まあ、先輩が無茶言うんだもんねえ」

彼女の言葉に少しだけ戸惑ったが安心感が大きくなった。

彼女は立ちあがって、バッグを手に持った。

「じゃあね、私はもう帰るから」

「うん、じゃあね」

僕は眠たげな目をしたまま彼女に別れを告げた。

彼女が去った後、僕は白紙の原稿用紙に目を向ける。

「はあ、ミュージカルのシナリオ作りも小学生も上手いかないなあ……」

そうやってボヤイテいると、なにかが足りない気がする。なんだろう？ と、暫く考えていると、何が足りないのかようやく分かった。

そう、トールの罵倒がさっきから聞こえないのだ。

「……トール？（ひそひそ声）」

「……」

トールの返事が無い。

どうしてだろうと思って考えていると、僕が途中で挫折した本が

僕の目の前にある。

「……もしかして、これのせい？」

偉大なる賢者様も英知の書の睡魔には勝てなかったようだ。

第14章 人生とは畏だらけである！

「ふあああ」

僕は机の上に突っ伏す。まるで、僕の中にある気力という気力を根こそぎ奪われた気分だ。

「どうしたんだ、田中。まるで、テスト前の俺みたいに憂鬱そうだな。昨日にまして、ひどいぞ」

清水がおかしげに尋ねる。テスト前でもないのに、うなだれる僕を不思議に思っただけ。

「ああ、うん。それはね……」

僕は突っ伏しながらも、彼を上目づかいで見上げて、昨日の放課後の出来ごとを話し始めた……

「なんやて！ ミュージカルのシナリオが出来ていないって！」

鋼部長の叫びが僕の耳に響く。僕はビクつき、周りの部員は部長が次にどうするか興味津津で見ている。

「はあ、シナリオのあらすじも出来あがらんとは、なあ～んにも出来へんで」

部長が仰々しく嘆息する。それに見かねた副部長はおずおずと声をかけた。

「……ねえ、鋼ちゃんもシナリオを考える話だったよね。どうなの？」

部長は仏頂面で、大きく胸を張り応えた。

「もちろん、まだ出来てへんで！！」

部長の返事にみんなズッコけた。

「な、なら、どうして彼を責めるのよ」

「別に、責めてあらへんで。うちも彼もシナリオが出来上がらなかつた事が悔しかっただけや」

「全く……、やってらんないわ」

部長の応えに副部長も嘆息する。

部長は副部長の呟きを無視して、部員全員に声をかけた。

「うちも彼もシナリオが出来上がらへんかった。というわけで、皆もシナリオを作って来い！ 来週の月曜に発表や！」

部長の発言にみんながざわめく。

「おい、シナリオだってよ。どうする」「何にしようか」

みんなが互いに話し合う。

「やっぱり、定番のロミオとジュリエットは？」

「真夏の夜の夢も捨てがたいわ」

「オペラ座の怪人もやってみたいわ」

「意表について、忠臣蔵をミュージカルでやるのは？」

「忠臣蔵なんて無理だ」

「トムとジェリーが良い！」

「ここはプリキュアにするべきだ」

「新しい物に走るなんて俗物だ！ ヒーロー物の定番は仮面ライダーと宇宙刑事ギャバンと決まっている」

「仮面ライダーはいいとして、なんでギャバンが出て来るんだよ！」

みんなが互いの意見を言い合って、部室内はカオスな状態になった。最初、女子部員が言った三つの意見まではまともであったが、

その後はみんな酷い意見しか出てこない。

「なんか、僕、完璧に置いてかれているな……」

『いつまで醜く言い争っているんだか……。とつとと歌って、トオルの歌声を鍛えてもらわなくては困る。いつまで俺に、この状態に甘んじろと言うのか』

偉大なる賢者様は俗世の人々の醜い争いに「ご立腹のご様子です。」

「へえ。それで田中もミュージカルの内容を考えているのか」

「うん、でも、文化祭できちんとした舞台になるのか不安だね」

僕は再度、ため息をつく。入る部活を間違えたかもしれない。そんな僕を見て、清水は苦笑する。

「まあ、何とかなるんじゃないかねえの？」

「だと良いけど……」

清水は少し考えてから話し始めた。

「俺もさ、空手部にも大会があるんだけどさ、顧問に努力すれば一年で大会に出られるかもって言ってもらったんだ。俺は小学生の頃から道場に通ってたからなあ。」

清水は照れ臭そうに頭を掻いて続ける。

「でもさ、試合に出られる事は誇らしいけど、試合で失敗して恥をさらすんじゃないかって、怖くも思う訳よ。そんな時はどうしたら良い？ 逃げたら良い？」

「いや、その……」

清水の思わせぶりの笑みに、僕は返事に戸惑ってしまふ。

「成功と失敗も、栄光と挫折も、何もしなければ、何も無い。自分には無理だと決めつけて、努力をしなければ何も手に入らない。だから、何かを見つけたら、それに向かって努力すりゃいい。俺はただ、空手を一生懸命に取り組む！」

清水の言葉に僕は啞然とした。昔、安奈^{あんな}が言っていた事にそっくりだ。以前、安奈は小難しく言っていたが、清水と全く同じ事を言っていたのではないかと思う。

僕は少し笑って応えた。

「そうだね、僕も頑張ろうかな？」

「ああ、その意気だ！」

清水がほほ笑む。

僕は弱気で臆病な自分を嫌ってきたが、自分には無理だと決めつけて結局何もしてこなかった。自分を心の底から変えたいと思ったのはこれが初めてだ。今まで何にもしてこなかったが、自分を変えたいと思った事自体だけでも、自分で思うのもなんだが「自分は進

歩した」と思う。

これも、トールが来てからの変化だと思う。もしかしたら、トールが僕の中に入って来た事はたんなる偶然ではなく、必然だったのかもしれないと僕は思った。トールには何かの運命みたいな物の予感を感じるような気がするような気配がする。

僕は学校帰りにスーパーへ寄る。冷蔵庫の冷凍食品も残りわずか。僕は兵糧を得て、空腹との戦い^{いくさ}に備える。今日のサミツコは色々と安売りなのだ。お魚やお肉・卵も安い。カップ麺も安いし、冷凍食品・アイスも五割引きだ。僕は卵を一パックとカップ麺・冷凍食品・アイスをかごに詰め込む。栄養の偏り、高脂肪・高エネルギーの食事をついつい取ってしまう。

「全く、これじゃあ栄養が偏って病気になっちゃうんじゃないか？メタボに苦しむ現代人が溢れかえっている時代なのに……。サミツコは僕らをメタボにして人類を滅ぼすつもりか？」

『だったら、たまには他の物も食え。最初の内は新鮮な味だったが、毎日毎日食われると飽きて来る。もっとうまい物を食いやがれ』

トールは僕と味覚を共有している。最初の内は僕が冷凍食品を食べるのに賛成していたが、冷凍食品が毎日続くと、さすがに嫌気がさしたようだ。

僕とトールが文句を垂らす、もちろんサミツコは野菜なども安く売っている。メタボで倒れる人がいても、それはサミツコの所為ではなく、買い手の所為である。もっとも、冷凍食品中心の食事よりも不健康なファーストフード店など、より悲惨な食事をする人もいるらしい。三食ともマップとか、吉田家とか……。

（この小説を読んでいる良い主婦はきちんとした食事を家族に振るいましょう。油断大敵と言いますが、気を抜くとお腹周りにし脂^{あぶら}がのります。油と脂……、あまり上手くありませんね）

僕がレジに向かおうと足を進める。

「田中君、偶然だね」

「あ、渡辺さん」

同じクラスでコーラス部に入っている渡辺さんにであった。彼女はこちらに歩み寄り、僕が両手を赤くしながら持っているかごを覗いた。

「田中君、ずいぶんと偏った買い物だね。体壊しちゃうんじゃないの？」

クスクス笑う渡辺さんに僕はむすつとして、渡辺さんのかごを覗いた。

「コーンフロスディに、チョコクリスフィー・シヨコワ・フルーツグラノーマ……。どれもシリアルばっかじゃん。渡辺さんも人の事言えないと思うけど」

所でフルーツグラノー•って、なんだかRPGゲームの魔法の呪文みたいだね。勇者がグラノー•を唱えていそうだよ。絶対に何かの上位魔法だよ。

「はは、でも田中君よりもマシな食生活だよ」

お互い食事に対してテキトーな考えしか持っていない事に関しては、五十歩百歩である。

忙しい現代人は食事がテキトーになり、心のゆとりを失くし、さらに食事がテキトーになるという負のスパイラルを抱えているのかもしれない。

僕らはレジで会計を済ませた。渡辺さんはポイントカードを忘れたので、僕が渡辺さんのポイントを貰った。20ポイントとは言え、とっても得した気分だ。

僕と渡辺さんはサミッコを出て、途中まで一緒に歩く。

「ミュージカルのシナリオ作りねえ…、コーラス部は結構ノリが良すぎよね」

「そうだね、部長が凄すぎだね」

僕は苦笑して答える。

「所で、渡辺さんは何で僕をコーラス部に誘ったの？」

渡辺さんは少し照れたような顔をした。

「一人で行く事に少し緊張していたからよ。……まあ、それと……」

渡辺さんは少し思い出すようなそぶりを見せた。

「あの時の田中君の歌は、なんか独特だったから。なんて言うのかなあ、上手と言うか、魔力があると言うか……」

「そ、そうかなあ？ 下手くそな歌だったと思うけど」『全くだな』
彼女はクスクス笑い、トールは僕の言葉に茶々を入れる。

「プツ、確かに、あの歌詞は無いわあ。メンドーを連発するなんて」
『本当、お前はセンスがねえよなあ』

「そんな言い方しなくたって良いのに……」

僕は口を尖らせて彼女とトールに対して文句を呟く。

僕は苦笑しながら、彼女はクスクス笑いながら歩いていると、黒い三連星がやって来た。

『とおる！ とおる！ 遊ぼうよ！』『遊んでだなあ』『私のお世話をしてもよろしくてよ』

三匹は僕の足元のじゃれる。

「あら、可愛い子猫ね。田中君が飼っているの？」

「あ、えつとねえ。近所に住む野良猫なの。よくウチに餌をねだりに来るんだ。」

マンシヨンで飼っているとは言えず、僕は言葉を濁す。

「へえ、私も一軒家だったら飼いたいわ」

渡辺さんはしゃがみ、エルフィーとマリー嬢の顎を人差し指で力リカリ搔く。二匹は気持ちよさそうに目をトロンとさせている。

彼女は3匹をなで続けていたが、五時を知らせるチャイムが鳴り響いた。どこにスピーカーがあるのか分からないが、木琴らしき楽器で演奏される「帝国のマーチ(The Imperial March)」に、僕らは帰宅しなければならないというプレッシャー

を感じる。

「じゃあ、ここでお別れね。また明日学校でね」

「うん、また明日」

僕と子猫達は帰り道を歩く。

そんな僕達の背中を渡辺さんは暫くの間眺めていた。

「はあ、人前で猫ちゃんとお話する訳にはいかないよね……。それにしても、田中君は不思議な雰囲気があるなあ。なんか田中君の中にもう一人別の田中君がいるような……」

彼女は独りごとを呟いてから、歩き始めた。

第14唱 人生とは畏だらけである！（後書き）

「よお！ 暇を持て余して仕方無い、俺様こと、偉大なる賢者のトール・Ｔ・ナーガ様だ。全く、俺と魂を共有しているトオルは情けないっいたらありやしない。俺様の偉大なる賢者の名が廃るぜ。律義にこの物凄く退屈でくだらねえトオルの活躍を読んでくれる奴ら、俺様から一応礼を言っておくぜ。偉大なる賢者の礼を有り難く頂戴しな！ おっと、時間が迫っているな。ここで次回予告！

「エルフィー、僕はもう眠いんだ」

川端で横たわる少年、それに迫る魔の手！

悲しげな目をしたクラスメイトの清水と対峙するトオル！

「ざんねんだね、田中。…ここでお前と争う事になるとは……」
部活仲間の渡辺が妖艶にほほ笑む。

「だめよ、そんな乱暴にしちゃ。……皮からはみでちゃったわね」

いつたい、いつ登場するのか、主人公トオルの幼馴染の二人！

黒い真珠のような子猫達の瞳はいつたい何を語るのか！

次回を期待せずにお楽しみしろよな！！

第15章 人には譲れない物がある

「ふう、これでしたら家は家の食卓は安泰だな。」

家に帰った僕は、戦利品を冷凍庫に押し詰める。冷凍庫の中は、ねずみ一匹も入るスペースがないが、冷蔵庫はコーラ一本しか入っていない。駄目ダメオーラが満載の冷蔵庫で、夏場の暑い時は冷蔵庫に入れる位のスペースが在る。

「はあ、また冷凍食品三昧か……。とおる、今度はしゃぶしゃぶとか、焼き肉、すき焼きとかさあ、色々な物を食べたいんだが」
「高級な物はあきらめてよ、って言うか、色々な物ってどれも肉だし」

僕はため息をつく。もちろん僕だって叶うことならば、焼き肉を食べたいのだ。

「僕も、安楽亭で焼き肉食べたい！」

「肉は良いんだなあ。神戸牛を食べたいんだなあ」

「私は万世で黒毛和牛のランプステーキを食べたいですわ」

「そんなのちみつ子猫達にはまだ早すぎますう！ 子猫は子猫らしく、キャットフードで我慢しなさい！」

僕は子猫たちに一喝する。なんとも子猫のくせに贅沢を言うもんだ。僕のお年玉とおこずかいを総動員させる事になってしまう。

「早く肉を食べたいよあ！」「」

「今度、吉田屋の牛皿を買ってきてあげる」

僕は子猫達に言いつける。（良い飼い主は猫に玉ねぎを食べさせてはいけません。玉ねぎ、チョコレートなどは猫にとって毒になり、猫の命を脅かします。吉田屋の牛皿なんて、もってのほかです）
「はあ、仕方無いなあ。今度商店街の肉屋さんに売れ残った、深谷和牛（埼玉県産の黒毛和牛）でも貰おうかなあ」

エルフィーがため息をつく。

「なっ、なんだとお！？」

僕よりも良い物食べているよ！……僕だって、僕だって黒毛和牛が食べたいよ！！　なんで、主人の僕よりも良い物を食べているだ、こいつらは！！

僕は歯ぎしりをし、子猫達に対して、かつて無い程の敗北感を味わった。僕が贅沢するのは、一年に一度だけ牛角に行くぐらいなのに！

僕は時計を見やる。ただいまは、七時である。

「よし！　今日は僕も良い物をたべるぞぉ！！」

僕は拳を握り、立ちあがる。思い立ったら吉日、善は急げ、急が場回れと言ふ。僕はこれから夕食のプランを立てる。

『おお！　なら焼き肉行かねえか？　高級らしい、レバーとかハチノスとか食べてみたいぜ！』

ツールはこの世界の事に詳しくないので、価値が僕基準になつてしまふのは仕方のない事だ。

尋ねて来るツールに、僕は高らかに宣言する。

「あともう少しすれば、スーパーの御惣菜に半額シールが貼られる。生姜焼きとか、刺身とかを手に入れるぞぉ！」

「……………」

偉大なる賢者様は沈黙で御語りになられた。

僕は●エツの食品売り場で虎視眈々と獲物を待ち構える。目標にターゲット半額シールが貼られるまで、推定残り時間五分を切った。周りを見渡してみた所、調味料を見る振りして待ち構えている四十代の主婦、食料品売り場で悩んでいるふりをしているサラリーマン、カップ麺を選ぶ振りをして待ち構えている大学生、その他にも計八人の同業者が居た。

「……………ここは誇りを捨てて、目標の前で待ち構えるべきか……………」

僕が思案していると、新手の同業者が現れた。

「やあ、田中も面白い物か？」

「!？」

僕は後ろを振り向くと、クラスメイトの清水がいつの間にか立っていた。

「うわっ、何、清水君。君も買い物？」

急に現れた彼に僕は少し驚いた。

「そうだよ、割引シールを貼られた総菜とかを狙っているんだ。恐らく、お前も同じ目的の様な……」

清水は薄く笑う。

「そ、そうみたいだね」

僕は戸惑いつつも答える。

「残念だね、田中。……ここでお前と争う事になるとは……」

清水は悲しげな目をしつつも、僕に一步も譲る気はないようだ。

「……お互い譲れない物があるみたいだね……」

僕は改めて気を引き締める。例えば友達でも、自分の望みのためにぶつかり合ってしまう事もある。手を抜く事はできない。

清水は僕と目をそらし、少し離れた所で待ち構える。

しかし、思わぬ強敵が現れた。小学生の頃から空手をやっている彼ならば、体育会系の能力を発揮して、文化系の僕を圧倒するだろう。どうしたら良いのか思案していると、トールが声をかけてきた。
『とおる、ここは黒猫仮面ネロガトゥマスクに変身してみてはどうだ？』

トールが美味しい物を食べたいがために、僕に無茶な提案をしてくる。トールには、僕へのヤジを飛ばす事と、僕が食べた物を一緒に味わったり、テレビを見るぐらいしか楽しみがない。トールが僕に色々と要求する気持ちも分からなくもないけど……。

「そ、そんなの無理だよ。変質者だと思われて、店員に追い出されちゃうよ。と言うか、スーパーの割引食品を狙うヒーローがあつて良いはずないよ！ スーパーマンがスーパーでがめつい事をするなんて嫌でしょ!？」

トールの提案に僕は難色を示す。そんな事をしたら、恥ずかしくて仕方が無い。

「なら、素早くなる魔法を使うんだ！　そうして、少しでもうまい物を手に入れる！」

「加速魔法アクセルかあ。うん、やってみるか！」

僕は目を閉じ、意識を澄ませ、鳴ってもいない携帯を耳に当てる。歌を呟いても、他人に見られた時に話をしているんだな、と思わせようになだ。独り言を呟く可哀想な人だと思われたくはない。

僕は腕時計に目をやる。残り時間はカップラーメンを作る暇も無い程だ。失敗する時間は無い、一度きりのチャンスだ。

僕は素早くになりたいという願いを込める。割引食品を手に入れ、今日の食卓を豊かに盛りたてたいと思う。テレビを見ながら至福の時を過ごすのだ、と。

題名　風と共に駆ける

楽しい時は早く過ぎ

美しい時も終わりが来る

嬉しい時は矢より早く

喜ばしい時は光の如く

蒼い鳥　捕らえるは　とても難しい

出会っても　いつの日かは　別れが来る

風のように　去りゆく幸運　手をかすめ

遠ざかるを　眺めるだけ　自分がにくい

ああ　僕の手が　もう少し早ければ

あの風を　捕まえられるかもしれないのに

ああ　僕の足が　もう少し早ければ

あの光を　感じられるかもしれないのに

だからもう少しだけ

さらにもう少し先へ
あの光に向かって
もっと早く駆けよう

小声で歌い終わった僕は、閉じていた目を開いた。

僕は目の前で手を振ってみるが、なんの変化も無いようにみえる。
「あれっ、失敗したかな？」

僕は目の前で振る自分の手をじっと睨む。

『いや、とおる。周りを見てみる』

僕はトールの言う通りに周りを見渡す。

周りの人は立ったまま、割引シールが貼られるのを狙っている。

「どうしたの、トール？ 別に何も変わっていないけど……」

僕は怪訝な顔をしてトールに聞く。

『ほら、あのサラリーマンを見てみる』

僕はサラリーマンを見ていると、一本足だけで立ち、とても不安定な態勢だ。すぐに倒れてしまいそうにみえるけど……

「もしかして、あれって歩いているの！？」

そう、じわり、じわりとだが、確かにサラリーマンは歩いているのだ！

気をつけて周りを見渡すと、みんなの動きがとてもゆっくりだし、店内を流れる音楽もスローで流しているかのようだ。

「もしかして……！」

僕は腕時計を見て、10秒ほど数えてみるも、秒針が一回しか動かない。今の僕は約十倍にまで、肉体と精神が加速されているようだ。

「これは、……これは……、スゲー……！」

僕は目をまんまるにして驚く。

『おしっ！ これなら行けるんじゃないか！？ とおるもたまには

やるじゃないか。ぐんぐん魔法の技術が上がっていくな!」

トールは期待に満ち溢れている。

「そうだね! これで刺身と生姜焼きを手に入れてやるぞ!」

僕は自身に溢れ、テンションが高くなる。

僕とトールは虎視眈々と割引シールが貼られるのを待つ。

十秒経過する

三十秒経過する

一分経過する

「……なんだか、待ちくたびれて来るよ」

僕はため息をつく。

「クソっ、この魔法には欠点があったか……」

トールがいら立ちの声をあげる。

そう、通常の十倍にまで加速された僕らにとって、一分待つ事が十分待つ事みたいに感じられるのだ。待っても、待っても、店員はやって来ない。自分たちよりもゆっくり動く同業者を眺めるのも、イライラ、イライラしてくる。

三分後、店員がくるまで後少しの所まできた。

「ああ、もう! 早くシール貼られないかなあ」

「もう待つのがメンドーになってきた……」

僕とトールには、三分が三十分待ったように感じられるのだ。こんなの、デパートの大安売りでもないかぎり待っていられない。僕は生も根も尽きかけている。

僕がぼんやりしていると、トールが慌てたように僕を呼んだ。

「お、おいっ、とおる。人が集まっているぞ!」

「へっ、何?」

僕がトールの声に応じて目を向けると、食料品売り場に人が集まっていた。

「なっ！ 何故！」

僕は慌てて食料品売り場に向かう。

おばさんも、サラリーマンも物凄い勢いで割り引かれた品を籠に放り込んでいる。

みんなの動きが普通に見える。つまり、集中力が切れたため、魔法も解けてしまったようだ。全く、僕がぼんやりしている間にシールが貼られ、同業者に先を越されてしまったのだ。

僕は急いで、食料品を選びに行ったものの、もうすでに後の祭りだ。元々少なかった残り物である。お刺身、生姜焼き、鮭弁当など目ぼしい物はみんな同業者に狩られ、残った者は芋の煮物や、サラダ位しか無かった。

「そ、そんな……」

『この馬鹿め！ つたつく、使えねえガキだ！』

トールが罵倒し、僕はショックで膝をつく。他人を出し抜こうとした魔法が足を引っ張るとは！！ 策士策に溺れるとはこの事か！僕が嘆いていると、清水がこちらにやって来た。

「あちゃー、この様子だと出遅れたみたいだな」

清水はにやにやしながら僕に訊ねる。

「……ほっというてよ……」

僕はうなだれる。

ますます清水はにやにやした。

「良いのかなあ、そんな事言っちゃって？」

清水は籠から刺身の盛り合わせを取り出した。

「なっ、それは！」

彼は自慢げに笑う。

「ラッキーな事に、二つも確保できたんだぜ。田中が手に入れられなかったら渡そうかと思ったんだが……、どうやら余計なお世話だったみたいだなあ？」

「そ、そんな事ないです、そんな事ないです！」

僕はブンブン首を横に振るう。彼は笑って僕に刺身の盛り合わせを渡した。

「はいよ、俺に感謝しろよ!？」

「うん、うん、ありがとう」

僕は少し涙ぐみ、刺身の盛り合わせを大切な宝物かのように受け取った。持つべき物は友達のようなのだ。

『本当に役に立つなあ、誰かさんとは違って』

トールが嫌身を言うも、清水の目の前で言い返せない。何にもしていないくせに、腹立ってくる。

「田中、これ買ったら途中まで一緒に帰ろうぜ」

「うん」

二人の戦士は戦場を後にした。

「と言う訳で、今日は豪勢にお刺身だあ！」

『『『やったねえ!!』『』『』』

僕の叫び声に、エルフィーたちもはしゃいでいる。

「さてと、そうと決まれば酢飯を用意せねば」

僕は台所でご飯にすし酢を混ぜる。いい気分で「魚・国」を歌う。

「マグロ トロ ハマチ ♪ いくら 甘エビ ♪」

歌詞は僕の食べたいネタにすり替わっている。

「お醤油も、わさびも、わびさびもOK! 今行くね、お刺身ちゃん」

僕がうきうきでテーブルに向かった。

そして、はしを落とした。

『マグロおいしいね』

『サーモンも脂がのっているんだな』

『鯛は商店街のお魚屋さんの方がおいしいですわ』

三匹が清水君が確保してくれたお刺身の盛り合わせを食べ荒らしている。

「Noooo!!」

僕が絶叫し、三匹を手で追い払う。

『……なんてこった』

残っていたのはエビとホタテだけだった。マグロも鯛もサーモンもその他のお刺身は全て三匹の胃袋に収まってしまった。

僕は再び膝をついた。

「全く……、たったのこれっぽちか……。これじゃあ、食べた気がしないよ」

僕が嘆いていると、ラジーがこちらの顔色をうかがってきた。

『もし、食べないんなら、もらってもいいかなあ〜?』

『「食べるよ!!」るぜ』

僕は涙を流しながら、残りの刺身を食べた。

「うつうつ、……おいしい……」

僕とトールはもっと他の刺身を食べたかったが、未練を断ち切るために考えるのをやめて、今ある幸せだけを噛みしめた。

第15章 人には譲れない物がある（後書き）

トール：「次回予告はテキトウでっただな。少年の悩みはいつたいいつに回されるのか？ 早くしないと、次話までに自殺しちゃうかもな。とおる！ もっと早くしろよ。」

第16唱 自動温め機能はあてにならない！

『ふう〜。食った、くった』

三匹は満足げに目を細め、ポテ〜つと、ごろごろだらしく転がる。人が見れば「かわいい〜！」の感嘆の言葉が飛び出してくるだろうが、僕達にとっては「憎たらしい」の一言だ。

腹が立って仕方のない僕は、今日買ったばかりの冷凍グラタンを温める。しかし、電子レンジの中でグラタンが爆破してしまい、電子レンジの中を拭かなければならなかった。面倒でも、きちんとパッケージの通りの温め設定をしなければならぬ。電子レンジの自動温め機能は当てにならないのだ。

僕は容量が減ったグラタンをスプーンで口に運ぶ。最近の冷凍食品は進歩していて、レストランのグラタンとの違いが分からない。まあ、違いがある程のレストランに行った事がないだけかもしれない。僕にとっては、サイゼリアが三ツ星レストランだ。

「全く……、キャットフードのランクを下げてやろうか……」

苦虫を噛み潰した顔で、僕は食べ終わったグラタンの器を立てて握り潰す。派手な音を立てるが、もちろんプラの器だ。

『そんな事で目くじらをたてないで欲しいですわ。全く、器の小さい男です。そんな器の小さい男にはプラの器が良くお似合いですわ』

マリー嬢がツンツとする。彼女のごろごろ可愛い様子と、ちくちくした嫌身にギャップがありすぎる。普通の人には、彼女が人を馬鹿にしているとは分からないだろう。

いらいらする僕は、贅沢に駅で配っていた入浴剤を風呂に入れた。パッケージには「草津の湯」と書かれていて、お湯は薄い色に染まった。

「ふう」

僕は湯につかる。本物の草津の湯に入った事のない僕には、入浴剤が本物と似ているかどうかなんて分からないが、草津の湯と書かれている事が重要なのだ。プラシボー効果と言って、人は思い込みによって苦楽に大きく作用する。ことわざにもあつたと思うけど……、「心頭滅却すれば火もまた涼し」だっけなあ？

僕は下らない事を考えながら湯につかる。甲斐恵林寺の快川紹喜が知ったら号泣ものである。

「ばばん、ばばんばんばん、ばばん、ば、ばんばんばん」

僕は良い気分で呟くように歌う。

「良い湯だな！ ばばん、良い湯だな！ ばばん……………」

僕は何かを思い出すかのように歌を止める。そして、また歌い始める。

「ばばん、ばばんばんばん、ばばん、ば、ばんばんばん」

「……お前、歌の続きを覚えていないな」

「普通の子供が知っているのはここまでだよ」

僕は目を閉じながら答える。この草津の湯が本物かどうかなど関係無く、僕は湯を満喫する。

「だいたい、さっきの情けない歌はなんだ！ そんな下手くそな歌を歌われちゃあ、俺はいつまでたっても帰れないぞ！」

「もう、お風呂くらいゆつくり浸からせてよ」

僕は肩まで湯に沈める。お風呂のお湯には、僕の顔ではなくトルの顔が映っている。ゆらゆら揺れる水面で彼の顔が悪魔のような笑みを浮かべた。

「ようし、なら存分に浸からせてやろう。まともに歌えるようになるまで、風呂から出るな！」

「ええ！！」

苦楽は簡単に逆転する。さっきまでは極楽のように感じていた湯も釜ゆで地獄のように感じる。これぞ、プラシボー効果というものだ。頑張れ、僕。「心頭滅却すれば湯もまた涼し」だ！

「はひい」

熱い湯の中で歌い続けた僕は、頭がくらくらしてきた。目に映る景色が、僕のいる世界とは別世界のように感じる。テレビに映る光景のように、魚達が泳ぐ水槽の中のように。

……はあ、入浴剤に染まるお湯が、濁った川の水のようだ。

「はりえ？ 川の水……」

僕は何かを忘れているようだが、頭がゆだって思い出せない。

『とおる……、もう上がっていいぞ……』

ツールも言動がにぶい。僕ののぼせた感覚を共有しているみたいだ。

僕は茹でダコみたいに顔を赤くしてなって上がった。

「はあ、お風呂はしばらくいいや」

僕はパンツひとつでいすに座った。汗がひくまで待たないと、パジャマが汗でぬれてしまう。

「ぷはあっ！」

僕はからからのノドに牛乳を流し込んだ。ゆだった頭が叙除に冷めてきて、忘れていた事を思い出した。

「そうだ、川辺の小学生の事を忘れていたんだっ！」

自殺しかける程追い詰められていた子を忘れるなんて結構ひどい人間かもしれない。

『そうだ、黒猫ガトネロ仮面のなにが悪かったのか調べなければ』

「い、いや、それはもういいよ……」

『だめだ、いんた〜ねつとを開け。イタリア語で黒猫をなんて言うのか、調べる！』

僕はしぶしぶネットで検索する。

「なになに、黒猫はイタリア語でGatto（猫）Nero（黒）。って、事は……、黒猫仮面はイタリア語でガットネロ・マスチラ（マスク）が正しいのかなあ？」

『なんてこった！　これが、あのガキが否定的だった原因か！？』
「いや、確かに間違っていたけど……、小学生にイタリア語なんて分からないはずだし、だいいち、名乗っていなかったはずだけど……」

僕はさらに検索する。

「翻訳サービスを使ってみたけど、黒猫の仮面は「La masc
hera del gatto nero」みたい。

……長すぎる。黒猫をガットネロで、日本語だか英語を付けくわえてガットネロ・マスクで良いかなあ？　それとも、大人しく日本語が英語にするべきだったのかも……」

僕は激しく論争し合った結果、ガットネロ・マスクに決定した。
「よし、この名前なら完璧だ！」

『ああ、とおるも、なかなかやるようになったじゃないか』

「うん、トールのお陰だね……って、名前なんて、どうでもいいんだよ！」

最初は小学生の事を考えているはずなのに、変身後の名前作りに没頭してしまった。自分で名乗るなんて恥ずかしくて出来ないはずなので、物凄くどうでもいい作業だ。

「そうじゃなくて、あの子、何か悩みを抱えているようすだったじゃん。トールは気にならないの！？」

『ああ、そういえば、俺にも気になる事がある』

「トールもあの子の悩みが気になるよね。賢者って言ったら、人に頼られる存在だもん」

トールの考えるそぶりに僕はほっとする。はじめて、トールの人情というものを引き出せた気がする。

『お前は、あのコント・トリオを助け、猫の墓を作ってやった日、めきめきと魔力が上がった。魔法を使ったせいか、お前の心が強くなったのか、はたまた他人を助けた事が原因か判らないが、とにかくお前の魔力はあの時が一番上がった。つまりだ、お前が人助けをする事は、お前の魔力を上げ、俺が元の世界に早く戻れる可能性が

ある。ガキンちょを助ける事には賛成だ。一刻も早く、ガキを助ける！」

「……どこまでも自分本位だね……。少しは人情とか、思いやりとかないの？」

「はん、それってうまいのか？ まあ、俺はお前の味覚を感じるだけだ」

自分勝手ではあるが、一応人助けには賛成的であるらしい。

「はあ。でも、どうやって聞こうかなあ。悩みを離してくれるといいけど……。ねえ、エルフィー、君は彼にもう一度合わなかった？」

エルフィーはせっせと励んでいた毛繕いを中断して、こっちに顔を向けた。

「うん。今日、おやつもらったよ」

彼はまた、毛繕いに励みだした。

「ねえ、何か言っていなかった？」

彼は面倒くさそうにこっちを向いた。テレパシーで会話するのだから、毛繕いしながらでも出来ると思うが、両方をこなすのは大変らしい。

「お母さんがいないとか……。あとひとりぼっちだって」

「ねえ、他に何か聞いて無い？」

「知らない。おやつのビーフジャーキー食べるのに夢中になっていだから」

話は終わりだと言わんばかりに、彼は毛繕いを再開する。

「はあ、まあ仕方無いか。一自動温め機能（他人任せ）はあてにならないからね。それだけ分かれれば、上出来かな？」

そう、自動温め機能を使うのはいいのだが、温める物の管理をしっかりとしないとイケない。他人の力を借りても、他人に全てを任せてはいけないのだ。

第16唱 自動温め機能はあてにならない！（後書き）

「こんにちは！ ホットカフェオレが飲みたくて、牛乳をレンジでチンすると、牛乳が吹きこぼれてしまふとおるです。みんな久しぶりだね。この物語、最後の着地は完ぺきに決まっているんだけど、その間が問題なんだよね。フィギアスケートだって、跳ぶ所と着地が決まっても、その間の技が得点に大きく左右するしね。終わりよければ全て良しなんて、嘘っぱちだ。おっと、時間だ！ 今日ここまで。Ciao！！^{ちやあ}

魔法の歌のまとめ（プロローグ／第十六唱）

題名：お腹の痛いので飛んで行け！

（効果：便秘を癒す魔法。お腹の中の物が近くにあるトイレに詰まる。（第二唱参照））

グルグルまわる僕のお腹
ゴロゴロ暴れるお腹の虫
昨日食べた物はなんだっけ？

ギョルギョル響く僕のお腹
ギリギリ閉まる腸のお中
ユツケはダメと言っ^ゆたけ？

助けて助けて トイレの神様
炎の苦しみ 止まらないですか
僕の腸はメビウスの輪か？
無限の地獄からクモの糸を！

題名 遅刻しちゃうよ！

（効果：遅刻しそうな時に学校へ瞬間移動する魔法）（第三唱参照）

地獄の鐘が （リーンゴーン リーンゴーン）

悪魔の声が （キーンコーンカーン）

僕の頭は （ドーンヨーン ドーンヨーン）

お先の見通し真っ暗さ！

どうしたら良いの？

どうすれば良いの？

後ろから指さし笑い物

職員室はまっぴらなのに

神様仏様悪魔様

なんでもいいから助けて

僕のイメージ

僕の生活

僕のプライドを守るため

なんだってするから

お願い僕を

あの地へつれていって（リーンゴーンゴン）

題名：一握りの勇気（第七唱参照）

（効果：勇気と幸運が湧いて来る）

君が目の前で泣くのを見て

僕の心は痛む

君の涙がふるえるたびに

僕の心もふるえてしまう

本当は君に優しくしたいのに

僕の心は迷う

君に手を差し伸べようとして

僕の手が傷つくのを恐れる

ほんのわずかな

一握りの勇気が欲しい

君のもとへ駆けつける足が止まらないように
ほんの少しの

一滴の幸福が欲しい
僕のさしのべた手が君の手を握れるように

きつと誰もがそう思うはずさ
きつと誰もが優しくしたいはずさ
だからこの歌に勇気を見せて
どこまでも届いて欲しい
世界中のどこまでも・・・

題名 穴掘り (第八唱参照)

(効果：穴を掘る)

穴掘りホイホイ！
もぐらがホイホイ！
ザクザクと地面を掘るぞ
大切な宝を埋めるため

穴掘りホイホイ
ここ掘れ、ホイホイ
どんどん穴掘るぞ！
悲しみを埋めるため

心の宝物を埋めれば
それは未来への希望になる
心の痛みを埋めれば
それは未来では追憶になる

未来に喜びをもたらすため
過去の悲しみを思い出にするため
さあ、穴を掘ろう！

もう少し深くまで！

題名 心をつなぐ物 (第十唱参照)

(効果：動物にテレパシー能力を与え、使い魔にする)
寂しさを感じていた僕

君達に会った時 それが優しく、薄れていった

勇気出して、歩きだした僕

君達に会った時、君達は悲しげだった

涙なんて見たくは無いから

例えそれが他人の物でも

人は無感情ではいられないから

きっと、人は独りではいられない

寂しさに押しつぶされてしまうのだろう

一緒にいられるのかな？

ただ、ぬくもりを感じたくて

君達にそばに居て欲しくて

君達の姿に僕は癒される

でも、それで十分なのかな？

できれば、もう少し・・・

目は口ほどに物を言う

そう言うけどホントかな？

僕はそれだけじゃまだ足りない

言葉を使うは 人だけ

それだから人は 言葉無しでは寂しいのかな？

お願い、君達の心を聞かせて
人は言葉なしじゃ、理解できないんだ
見つめ合うだけではすれ違ってしまっ
だからお願い
君達の心を聞かせてくれ

題名 ネコトウマスク 黒猫仮面（ガットネロ・マスクに変更）（第十二唱参照）

（効果：変身ヒーロー；ガットネロ・マスクに変身する魔法）

どんなに君が遠くで泣いていたって
僕は君の泣き声を聞き逃さない
猫の耳はどんな声も捉えるから
僕に助けを求めて

どんなに君が遠くで嘆いていたって
僕は君の元へ駆けつけるよ
猫さっそうって意外と足が早いから
颯爽と駆けつけるよ

僕の心の中 その熱く燃える
正義の心が僕を導く
どんな困難が君に襲いかかっても
僕がそばについているよ

どんな時だって
君は独りじゃない
君のそばに僕がいて
家族、友達、恋人
みんな君を思っているから

君は、君だけのものじゃない
だから、僕は君に手を差し伸べるよ
君の心が挫けてしまわないように

魔法の歌のまとめ（プロローグ第十六唱）（後書き）

「はん、とおる。よくこんなくだらな歌の数々を生み出してきたな。まあ、お前の精一杯なのかもしれないがな。これに曲を作りた奴！ 募集中だぜ！ もし、そんな奇特な奴がいるならば、だが」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3936u/>

偉大なる賢者 トール&とおる

2011年11月26日19時25分発行